

平成25年4月号～12月号掲載分

区域再編を経て 次のステップへ

.....
ふるさとを取り戻すため、
ここがスタートライン

この時期の復興に向けた主なうごき

- H25. 4月 避難指示区域が見直される
- 7月 復興に向けて新たな検討体制をスタート（町民協働による進行管理部会、まちづくり計画検討部会）
- 7月 町内で営業再開第一号（㈱叶屋ガソリンスタンド）
- 8月 帰還困難区域のモデル除染が開始
- 8月 平成25年度 浪江町住民意向調査を実施
- 11月 進行管理部会から町への提言
- 11月 本格除染が開始



役場本庁舎に応急仮設診療所を開設（5月9日）



なみえ交流館がオープン（7月6日）



浪江焼麺太国がB-1グランプリin豊川で念願の
ゴールドグランプリ受賞（11月9～10日）



約130名が参加した郡山市での交流会（7月8日）



栃木県

木幡 武子さん(権現堂)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：3月3日 「平成25年4月 広報なみえ掲載」

富沢酒店頑張っています



▲今でも酒屋の看板娘

栃木県足利市で避難生活を送られている木幡武子さん。お会いすると実年齢より5歳から6歳は確実に若く見える元気のよい方です。マンションのご自宅をお伺いしたとき、お店でもないのに表札に富沢酒店と書かれていました。現在は息子さんそして商品のお酒と暮らしています。

震災前は浪江町権現堂で富沢酒店を営んでいました。現在は息子が3代目の店主になっていて、創業した親の代から数える90年の歴史がある店です。震災時は商品はもちろんのこと、家屋自体もダメージを受けました。今はあれからさらに2年間放置状態が続いていますので、避難生活が終わっても家の損傷が進んで家に住めるのかとても心配です。

震災後、避難することになって福島市、日光市と避難しましたが、足利市の娘夫婦が住んでいるマンションの隣が空いているというので、そこに住むようになり現在に至っています。玄関の表札に富沢酒店と書かれているわけは、現在店舗での販売はできないのですが、ネットによる通販は避難生活でも行えるので、座敷に通販用のお酒をおいて営業しています。しかし、風評被害の影響は大きく、安全なものにも関わらず福島県産のお酒は人気低迷し、ネットの販売だけをとっても震災前の1割未満に落ち込んでしまいました。

私が若いころはまだおらかな時代で、店の中にもつきりと言ってお酒の立飲みをする場所があつて、夕方になると仕事帰りに一杯酒を飲むお客さんがたくさんいて、賑やかな時代がありました。今は時代が厳しくなつて気軽にお酒を飲みに来る人が減ってしまいましたね。

震災前は商売で忙しい日々を送っていた私も、避難生活においてはあまりやるべきことが無くなり、昼寝をすることが多くなつたように思います。最近の楽しい思い出は、昨年10月に浪

江町や富岡町の友人たちで、飯坂温泉に集まり楽しいひと時を送りました。これからも皆さんと定期的に集まることができたいと思います。いまの私の心の支えは、皆さんで震災前に住んでいた場所に戻り、権現堂の富沢酒店を再開し元の暮らしを手にすることです。特別でも何でも無い震災前にあつた日常の生活を取り戻せることを、夢見て生きて行きたいと思っています。



群馬県

半谷 正彦さん(大堀)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：3月11日 「平成25年4月 広報なみえ掲載」

「浪江のキャニオンワークスは、 今日も元気に頑張っています」 そのことを浪江の皆さんに伝えたい

半谷正彦さんご家族は、浪江町当時の従業員の方々や親族とともに群馬県千代田町で事業を再開しています。これから先のことへの不安もあるなか、みんなで力を合わせて家業である縫製業を元気に守り続けています。お話しは正彦さん、妹の荒木美幸さん、半谷美也子さんからお聞きしました。

父である会長の早い決断もあり、震災直後の4月から事業再開の準備に入りました。取引先だった群馬県の企業から工場を借りることができ、7月21日には再スタートすることができました。工場は浪江のときの規模には及びませんが、当時の従業員であった親族とともにこの土地に移り、外国人研修生も含めてみんなで元気に頑張っています。幼いころからミシンの音のする工場の中で育ったようなも



▲左から美也子さん、美幸さん、正彦さん

物や自然が本当に豊かなところだったと、外に出てみて初めて実感しています。社会人野球チームにも入っていたので、練習や試合が終われば、毎週末バーベキューで盛り上がっていたことが懐かしいです。焼き肉の匂いにつられて、自然と人が集まっていたことが、つい昨日のことのようです。しかし今は、気軽にバーベキューもできないし、集うはずの仲間たちも離ればなれです。

のですので、やっぱりこの環境は自分たちの元気の源です。もし事業を再開せず、今も仕事もなく過ごしていたら、自分たちはどうなっていたのかと思います。何か頑張れるものがあるということ、本当にありがたいことです。浪江で思い出されるのは、夏の星空とカエルの合唱、そして美しいホタル。本当にきれいでした。何だか空の青さも違うように感じられます。浪江は食べ

最近、一時立ち入りで浪江に入るたびに、荒れ果てた地域の姿をみるとつらい思いに駆られます。もうあのころの暮らしは戻ってこないのではないかと。できれば福島県内には戻りたいという気持ちもありますが、浪江でなければどこでも同じようにも思えてきます。子どもの安全のこと、そして新しい土地に馴染んでいる子どもを考えると、そう簡単にはこの場所を動けない。

両親は、いつになるかわからないけれど、最後は必ず浪江の自宅に戻りたいと言っています。そんなことを語り合いながら、今後については、親族の中でも意見が分かれるところです。いつそのこと「もう浪江には戻れない」と言ってくれた方がいいのにと思うことさえあります。ただこの震災のことは、絶対に風化させることなく、子どもたちには伝えていく必要があると思います。

とにかく今は、浪江のキャニオンワークスとして、この土地で元気に頑張ることが自分たちにできることと思っています。



新潟県

谷田 きよさん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：3月7日 「平成25年4月 広報なみえ掲載」

避難生活の思いを後世に伝えたい

谷田さんは、現在新潟県柏崎市内で単身生活を送っています。4月下旬から、同じ柏崎市内で娘さん夫婦と一緒に新生活を始める予定です。

■震災発生から避難先の柏崎市の生活

震災発生後、当時妊娠4カ月だった娘と一緒に南相馬市へ一時避難しました。そのとき、新潟県刈羽村に働いていた息子が南相馬市まで助けに来てくれ、一緒に柏崎市へ避難しました。当時は、ガソリンを調達するのにとても苦労したのを覚えています。

柏崎市へ避難してきてから、昨年4月に夫が病気で他界、また同じ時期に私の身体にも病気が見つかってしまいました。現在、身体の方は少しずつ回復していますが、避難生活と重なり精神的にも辛い日々が続いてきました。

柏崎市では、浪江町から避難してきている人たちが集まる「浪江町コスモスの会」に参加しています。毎月第2・第4水曜日、30名ほどの仲間たちと一緒に、紙切りや絵手紙を作ったりしてコミュニケーションをとっています。

また、私は避難生活で感じたことやその時々思ったことを詩や絵に残しています。今では、その数が50以上にもなりました。

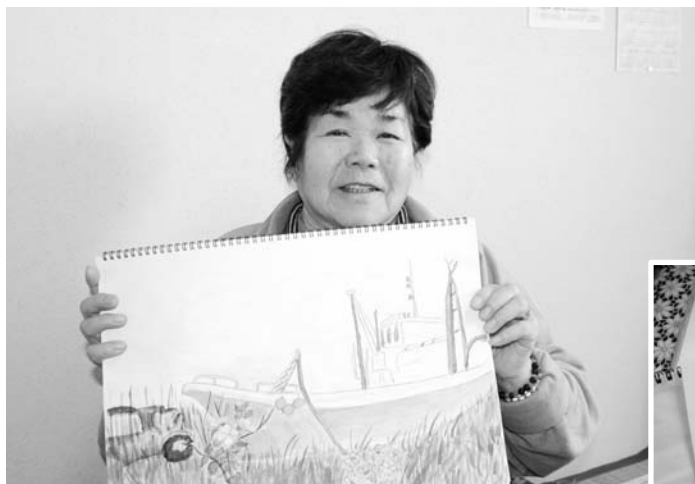
今後このような詩や絵を書き続け、後世に伝えていきたいと思っています。

■浪江町への思い

昨年7月28日に浪江町へ一時帰宅した際、笑い声やしゃべり声をすべてなくしてしまった静まり返った町を見てとても悲しくなりました。「家」というのは、人が1年も住まないとぼろぼろになるものだ実感し、せめてもと思ひ他界した夫の写真を静まり返った我が家の仏間に置いてきました。今年の3月10日にも一時帰宅し、翌日11日には柏崎市の方へ戻り哀悼の会へ参加します。

東日本大震災が発生してから2年：2年も経つと、浪江の心は忘れてはいませんが、ここ（柏崎市）の人間になつてしまつていく気がします。

柏崎市は、春は山菜取り、夏は海で魚釣り、秋はきのこ取りなどができる素敵な所ですが、雪の降る冬の生活だけはまだ慣れません。青い空が広がる、浜通りの温暖な冬がなつかしいです。



▲新生活に期待する谷田さん



▲谷田さんが書き留めている作品



木幡サチ子さん(立野)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内

取材日：3月7日 「平成25年4月 広報なみえ掲載」

私は人を元気にすることが大好き！



▲自宅でエステの仕事をしているサチ子さん



仲間に送っている手作り新聞▲

その日は次女の中学の卒業式でした。卒業式を終え、娘と二人、外でランチを済ませ自宅に着いたと同時に震災が起きました。まだ着替えもしていませんでした。翌日の夕方、避難命令に従い主人、次女、母、妹、叔母、そして長女家族と一緒に避難所に行きましたが、そこはすでに大勢の人。仕方なく私たちは、車中で一泊し、翌日、妹が住んでいるつくばに、そして長女家族は、末の妹のいる千葉の鎌ヶ谷に避難しました。つくばで10日ほどお世話になり、その後、長女が3人目の出産間近だっ

たこともあり、長女の夫が勤めていた系列会社の配慮もあり、東金市長や議員さんが親身になって探してくださったアパートを借上げ住宅にしてください、それぞれ移ることができました。その後一軒家に移りましたが、主人と息子は福島で働いているので、次女のありさと2人暮らします。母は、そのままつくばで生活をしています。畑を借り、野菜を育て、土に触れることが何より楽しいようです。当初は東金と一緒に暮らす予定でしたが、お茶のみ友だちもできて、つくばが気に入ったのか、こちらに来る様子がありません。母が元気なうちは、こちらから会いに行きます。

東金での暮らしが、ようやく落ち着いたころ、他にも避難している人たちがいるのではないかと、浪江町だけでなく、ほかの町の人も近くにいないのではないだろうかと思ひ、東金市役所に避難者情報を伺ったのですが、教えてもらえませんでした。そんな矢先、「茶話会」が行われ近隣に避難している人たちと会うことができました。参加された人たちは、それをきっかけに今も交流が続いています。「茶話会」後も、どうしているかと、一人ひとり訪ね歩きました。中には部屋に閉じこもっている人もいたので、今度はみんな花

見や楽しいことを一緒にできたらと思っています。
12月ごろからは自宅でエステの仕事を開いています。皆さんに知っていただこうとチラシをまいたりしましたが、なんの反応もなく、知らない土地で仕事を再開する大変さを実感しています。あまりにも長い避難生活でこれから先のことはどうなるかわかりませんが、今のところはここで頑張ります。娘も保育士になりたいと希望を持って学校生活を送っています。

私は、周りからよく「避難者に見えないね」と言われます。マイナスなことばかり考えていると落ち込んでしまうので、自分から前に進んでいくようにしないとと思っています。浪江にいたころ、長く働いていた会社で、会社を元気にしたいと思い、よさこいチームを立ち上げ、桜まつりや老人施設の慰問などをしていたことがあります。今は南相馬の日本舞踊の先生を中心にみんなで稽古し、福祉施設の慰問をしています。また、みんなと繋がりたいと思い「がんばっぺ新聞」という手作りの新聞を浪江の仲間に配ったりしています。

私は人を元気にすることが大好き！元気でいると、周りの人も元気になる、そう思いながら過ごしています。



福島県

伊藤 京子さん(川添)

取材者：一般社団法人葛力創造舎 下枝

取材日：3月13日 「平成25年4月 広報なみえ掲載」

もっと笑いあいたい

浪江町川添南上ノ原から郡山市に避難中の伊藤さん。混乱から新しい生活を築きなおしています。



■浪江での生活はいかがでしたか

長期の休みになると、家族が集まりました。家族全員、孫までみんな魚釣りが好きで、相馬、請戸、いわきと釣りにいきました。小名浜で花火大会があるときは、夜釣りをしながら堤防から花火をみるのが楽しみの一つでした。魚も好きで、どんこの煮つけも思い出のお料理です。

■震災時から今まではどうでしたか

震災の日は、接骨院から帰ろうとしているときでした。治療

が終わり家に帰ろうとしていたとき、震災が起きました。地震でゆられ、体が流されていききました。周りでは、水道管が破裂して水浸し、地面は割れました。地震がおさまり、自宅にいた主人が心配になり、すぐにバイクでもどりました。家の中はひっちゃかめっちゃかでしたが、その日は家族全員無事でほっとしました。

次の日になり、防災無線で避難の指示が出て、最初、娘の家族と一緒に津島に避難しました。そのときはすぐに、帰れると思っていたので生活用品もほとんど持たずに家を出ました。その後、息子の家族と飯館に避難しました。飯館で、放射能のことを知り、郡山北工業高校に避難しました。移動中の体育館で、主人が肺炎を起こし郡山市内の病院に入院しました。母は、浪江の養護施設にいましたが自衛隊に助けをもらい那須、矢祭町へと避難していました。私たちだけでなく、みんな大変だったと思います。

■現在の生活はいかがですか

現在は郡山市に住んでいます。近所に富岡町の知り合いができたり、県外に避難していた大事な友だちが郡山に戻ってきたので安心しました。私は車に乗れないので、その友人夫婦の車に乗せてもらって二本松の役場などに行ったりしています。

■いま感じていることを教えてください

一人でいるのは困るまではいかなければ、やはり寂しいですね。すぐに、しゃべれる相手がいらない。なにより笑うことが減りました。いろいろなイベントがあるようだけれど、足が確保できなかったり、路線バスなどに慣れていないのでなかなか行きづらいです。浪江町の郡山自治会が発足したけれどなかなか動きが見えない。もっと動きがあってもいいのではないかと思います。復興住宅を早くつくっていたら、浪江町民同士で住みたいですね。マンションではなく、小さな畑でもいいので、庭いじりをしながら家族と一緒に住みたいですね。



埼玉県

舩倉 豊さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：4月7日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

「待っているのではなく、自分たちのこれからは自分で決めることが大切だと思う」 — 1人ひとりの生活再建に求められることとして —

舩倉さんご夫妻は、おばあさんや娘さんたちと埼玉県川越市で生活しています。親戚縁者の支援もあり、震災直後の3月末には総合卸売市場に勤め始め、すでに2年以上が経過しました。お話しは、豊さん、妻の京子さんからお聞きしました。



▲左から豊さん、京子さん

震災直後の3月末に、親戚を頼って埼玉県所沢市に移動しました。そこで川越市にある総合卸売市場に野菜の詰め込みなどをする仕事を夫婦で得ることができました。仕事があることは本当にありがたいです。ただ、請戸で漁をしていた時は、仕事の時間の管理などはすべて自分でしていたのですが、今度は勝手が違うので慣れるのに苦労しました。埼玉県内の高校に進学した三女が、高校卒業後は短大

に進みたいと言っているのですが、この目標を達成するまではこの土地で暮らして行こうと思っています。

でも、都会の暮らしは、やはり合わないですね。窓を開ければ近所迷惑を意識しなければならぬし、何かと気を使うことが多いです。できれば知り合いの多い福島に近くで暮らしたいと思って色々調べています。自分たちのこともありますが、何よりも将来、娘たちが帰ってくるのでできる

実家は作っておく必要があると考えています。

こうして福島から外に出て暮らしてみると浪江での暮らしがどんなに良いものだったかを感じます。新鮮な魚や野菜、おいしいお米など、こちらでは味わえないですね。浪江にいた頃は、魚の切り身の無駄な部分を大胆に捨てていたのですが、随分ともったいないことをしていたのだなあ

と、ふり返っています。

浪江では、みんな力で合わせてまちづくりをする雰囲気もありました。商工会の原田さんとのつながりで、漁師の家5軒を受け入れる民泊の体験事業などもちようど始まった頃でした。これから盛り上がるというときに震災が来てしまったわけですが、あの頃のような暮らしやまちづくりができないことが残念です。

役場の方でも町の復興に向けた取り組みを進めているようですが、やっぱり自分たちのこれからは自分で決めていく必要があると思います。役場の動きを待っているのではなく、どこかで踏ん切りをつけることが大切だと思います。

震災後、私たちも多くの方に助けられてここまで来ることができました。その御恩に報いるためにも、しっかりと家族で力を合わせて生きていくつもりです。



山形県

高橋昭太郎さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：4月3日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

町の皆さんの「かけはし」に



▲皆さんの所にもなみえ焼そばを販売にいきます。皆さんに会える日を楽しみにしています！

権現堂で昭和37年から、すっぽん料理店「丸福」を営んでいた高橋さん。現在、山形県米沢市で暮らしています。昨年7月、メトロ（食品卸売会社）からケータリングカーの寄贈を受け「キッチンなみえ丸福」として営業を再開し、なみえ焼そばの販売を通して町民の皆さんに懐かしい味と笑顔を届けています。

地震の後、「津波が来る」という無線を聞き、家族5人で近くの役場2階に避難しました。次の日「西のほうに逃げる」ということを聞き、朝避難しました。津島で1晩過ごしましたが、母が当時93歳という高齢で体育館には長く置いておけないと思い、息子の自宅がある福島市に向かいました。息子の家に避難した人数は、親戚合わせ15名にもなりました。その後親戚を頼りに山形県米沢市に移動し、製材所を営む知人の佐藤さんのア

パートを紹介してもらい暮らしています。

避難した当時、すぐにこの場所を提供してくださった佐藤さんには大変感謝しています。母は去年2月体調を崩したこともあり、妻と母2人飯坂町の借り上げ住宅でリハビリに行きながら元気に暮らしています。米沢から約30分の場所なので、私も行ったり来たりしています。

昨年、福島県飲食業生活衛生同業組合に寄贈いただいたケータリングカー3台のうち一台をお借りし、7月から営業を再開しました。郡山市や会津若松市などの仮設住宅、山形県内のイベントなどでなみえ焼そばを移動販売しています。米沢市の観光物産協会の方に、山形県内のイベントをつないでいただき、今年には物産協会会員になり恩返しも、と考えています。

事業再開について息子からは「お父さんの仕事は定年がない。神様がこの地震で定年だつて辞令よこしたと思つて、後はゆっくりしてもいいんじゃないか」とも言われたのですが、自分が事業を再開し、働くことによつ

て、3人に店で一緒に仕事をしてもらうことができました。また、同じように被災した人にも働いてもらい、生きがいもつくることができると思いました。

50年以上、朝決まった時間に起き、仕事をして寝るという生活を続けてきて、今回の震災で仕事がないことほど辛いことはないと思いましたが、私も生きがいがありました。働くこと生きがいにして人間変わったようになっています。何か世の中のためにするのは、と思つています。50年以上商売しているので常連の町の皆さんに言えば、お互い涙を流して昔話をし、故郷に帰れるか帰れないかの話にもなります。「いのちのかけはし」という言葉を名刺に書いていますが、食を通じて皆さんと話し、色々な悩みを聞いたり聞かせたりもできる、町の皆さんの「かけはし」になれるよう販売を続けていきたいですね。

帰れるとしたら、早く浪江に帰って元気な顔で営業し皆さんに会いたいです。希望を持ち1日も早く帰れることを願っています。



古農りつ子さん(酒井)

取材者：NPO法人あきたパートナーシップ 高杉

取材日：4月6日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

「青春の今を生きています」 — 両親の思いも感じながら、 明日に向かって進んでいます —

震災当時、お姉さんが秋田市にいたことから、家族で避難しました。間もなく、今住む一軒家に落ち着くことができ、高校生活が始まりました。秋田の地方紙にもその活躍が取り上げられるほど、部活のスピードスケートでは活躍しています。お料理を作ることが趣味の高校3年生です。青春真っ只中の彼女にお話をお聞きしました。



▲お気に入りのスケート靴を持って。

震災直後に来た当初は、秋田にすぐには馴染めなかったのですが、その年の4月から高校1年生として通学を始めることができ、クラスの仲間にも良くしてもらい、仲のいい友だちもできました。

部活はスピードスケート部に入って、頑張つてインターハイに出て、それから国体にも出場することができました。部活は苦しいこともありましたが、楽しいことがたくさんありました。

2年生までは部活の友だちと一緒に過ごす時間が多かったのですが、大学に進学することを決めたので、これから勉強しなくてはいいませんが、まだ、はっきりした夢が持てなくて「考えなくて」と思っているところです。

つい先日、浪江にいた時の中学の部活の友だち7人が福島市に集まり、すごく楽しかったです。何百回に1回とかの地震だったでしょ？それだけでなくて原

発事故もあったから、こういう運命だと思うけど…。友だちが言っていたんですけど「東北の人なら（辛抱強く粘り強いから）乗り越えられる、だから東北の人がこういう試練に遭ったんだ」って。そんなことも浪江の友だちとメールや手紙でやり取りしています。辛いことだけじゃなくて、友だちや仲間との絆が一層深まったという実感があ

ります。でも、全国の人には「震災のことを忘れないで」と言いたいんです。ボランティアもだんだん減ってきているといいますが、これからでも行ってみたい。大きい。

私の両親は農家だったので、やはり農業をいつかやりたいと思っているようです。もちろん辛いこともあったと思いますが、自営で浪江の広々とした大地でやってきたのだから、今のサラリーマン生活は大変だと思いません。秋田の冬はやっぱり寒くて辛かったし、浪江がやっぱり懐かしいです。

私はまだはつきりした夢が見つかからないと言いましたが、大抵は理科系を希望しています。動物や生き物が好きなので、その方面に進むことができると考えています。復興の役に立てれば、直接、浪江や福島復興にということではないかもしれませんが、何らかの形で社会のために役立てればと、漠然とだけ考えています。



木幡 瑞秋さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部

取材日：4月10日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

未来を信じて前に進みたい、あの日の記憶と共に

現在、木幡さん家族は別々に暮らしていますが、それぞれの土地で元気に生活をしています。

木幡さんは、以前、幾世橋で歯科医院を営んでいましたが、今年2月に福島市矢野目で再開し、忙しい毎日を送っています。

■あの日は診療中でした

1回目の揺れが収まり外へ出てみると、周りはひどい状況になっていました。揺れが落ち着いたところで患者さんとスタッフには帰宅してもらいました。

揺れが収まった直後はまだ電気は通じていたので、情報を得てから北幾世橋の自宅へ戻りました。津波の心配もあり、家族とともに高台へ急ぎました。高台を通って移動し、避難所の幾世橋小学校へ行き、そこで両親とも合流できました。避難所では「原発の3km圏内、10km圏内の避難は」などと原発事故の話が聞こえてきたので、翌日12日には南相馬市の親戚を頼って移動しましたが、その日のお昼には妻の実家がある山形へと向かいました。

避難先で何もしないで受け身でいることに耐えられなかったこと、家族のことも考え、3月下旬には就職活動を始めました。友人の紹介もあり、秋田県能代での仕事を見つけ、家族を山形へ残し、単身で向かいました。

■これからの人生を前向きに

昨半夏に福島に戻り、福島市で歯科医院の再開の準備を始め、ようやく今年2月1日に開業しました。

患者さんたちをはじめ、今まで作り上げてきたものやいろいろなつながりが福島にはたくさんあります。やはり福島に戻りたくないと思いました。仮設住宅に近いということもあり、患者さんの多くは浪江の方です。待合室はちよつとした憩いの場になっているようです。

現在、両親は宇都宮、息子は東京、妻と娘は仙台と、みんなばらばらに生活をしています。それぞれの土地で新しい友人を作り、今の生活を充実させています。震災がなかったら新しい人との出会いもなかったかもしれません。状況を嘆いて後ろばかりを振り返るのではなく、でも過去のことを忘れるのではなく、前向きに今の状況を捉えて進んでいきます。前へ進んでいくしかないと思っています。



▲こわた歯科医院にて



小野寺みどりさん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：3月23日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

子どもの笑顔と夫の頑張り、 そして東北人の絆に支えられて

埼玉県、二本松市での避難生活を経て、2011年8月から仙台市で暮らしている小野寺さん。ご主人が経営する会社の経理の仕事をごなしながら趣味の手芸にも力を入れるなど「落ち込む暇なく頑張っています」。



▲小野寺さんご一家。左から新次さん・祥汰くん・みどりさん。手作りのスヌード（マフラー）と上履き袋を手に。

■避難に次ぐ避難の2年間
この2年間はあまりにいろいろなことがあり、長いようであるという間に過ぎた気がします。震災が起きたのは、ちょうど子どもが小学校に入学する年でした。私たち家族はすぐに都路の親戚宅に逃げ、そこにも避難命令が出たので叔父が住む埼玉県朝霞市へ。そして1カ月後、主人が南相馬で仕事を再開することになったため、二本松市の借上げ住宅に移って避難生活を送りました。でも、当時の二本松は放射線量

が高く、小学校では課外授業も外遊びもできない。子どものことを最優先に考え、私たち親子3人は夏休みに仙台市に移転しました。震災前、同居していた私の両親は今も二本松で暮らしています。

■子どもはサッカーに夢中
もう浪江には戻れないんじゃないか？ 新しい環境になじめるか？ 不安を抱えながらの引越でしたが、子どもは転校してすぐサッカーチームに入団し、お友だちもたくさんできました。初めはボールに触ることもできなかった子どもが、今日はミニゲームで何点得点を入れたよって楽しそうに話してくれたり、元気いっぱい校庭を走り回っています。そういう姿を見るのが嬉しくて、私も少しずつ前向きになれました。

主人も愚痴ひとつこぼさず頑張ってくれています。会社が浪江にあり、たくさんいた従業員も散り散りになってしまったので、震災後はほとんどゼロからのスタートでした。辛いこともたくさんあるはずですが、いつも笑顔でいてくれる。だから私も頑張れるんです。

■手芸、そして新しい喜び
最近の私の日常は、子どもが

学校に行っている間に主人の会社の経理の仕事をし、時間があると編み物や縫い物をしたり、お母さん仲間とランチに出かけたりと、それなりに充実した毎日を過ごしています。

手芸を始めたのは仙台で暮らし始めてからです。ミシンを買って子どもが学校で使う袋物を縫ったり、マフラーを編んだり。震災前より仕事が減ったし、1人での時間が増えた分、何かやっていないと落ち着かないというか、時間を無にしたくなかったんです。でも始めたら面白くて、ハマってしまいました。材料の毛糸や布を探して歩く時間も楽しいし、甥や姪に手作りの品をプレゼントするとすごく喜んでくれるんです。その顔を見るのが嬉しくて。

学校行事を通じて私もお友だちが増えました。浪江出身のお母さんとも親しくしています。気の合う方が多いのは同じ東北人だからかもしれません。震災を経て、かえって絆が深まった気がします。仙台は私たちの第2の故郷になりつつありますが、距離的に離れてしまった浪江のお友だちとも、いつか会える日が来ると信じています。どうかお元気で頑張ってください。



山形県

佐藤 三夫さん・桂子さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：4月12日 「平成25年5月 広報なみえ掲載」

いつまでも家族一緒に



▲左から桂子さん、三夫さん

佐藤さんご家族は、震災後、福島県内から石川県へと移動し、現在は妻・桂子さんのお仕事の関係で、山形県酒田市で暮らしています。母・芳子さんは足が悪くなったため近くの施設に入居しましたが、今は元気に暮らしています。

■三夫さん

3月12日が父の7回忌でしたので、その準備で忙しく過ごしていた矢先の地震でした。妻は、準備のためサンブラザーで買い物をしていました。すぐに自宅の母のそばに帰り、私は双葉町の職場にいましたので、自宅に帰れたのは夜でした。朝になり、避難を知らせる広報車が回ってきましたがよく聞こえず、明るくなつてから、避難のを知り、小高にある私の実家に避難しました。母は寝たきりでしたので、布団ごとそのまま車に乗せ身の回りのものをまとめ、す

ぐに戻れるだろうと思いきや、家を出ました。しかし、一晩過ごした後、小高も原発から30km圏内避難指示が出て移動せざるをえませんでした。

その後、小高から津島、川俣、二本松など様々な場所を転々となりました。母は避難所では周りの方に迷惑をかけるからと、気を遣い外の車の中で過ごす夜もありました。その避難の状況を知った姪たちが、自分たちが嫁いだ石川が長野にきたらどうかと言ってくれ、石川県かほく市に避難することを決めました。祖母のことも心配し、ガソリンを持って新潟のサービスイリアまで迎えに来てくれ、とてもよくしてくれました。

石川県で母が介護認定を受けることになりましたが、ケアマネージャーの方にとってもよくしていただき、浪江町との連絡や介護の手続きもスムーズでした。本当に感謝しています。現在、母は近くの施設に入居していますが、元気に暮らしており安心していています。

■桂子さん

子どもの頃長く暮らしてきた幾世橋の小学校から見える風景を懐かしく思い出しますし、自

宅のあった権現堂順礼川原の隣組の皆さんも元気でいてくれるといいなと思います。また、佐屋前の老人会の皆さんには母が大変お世話になりました。酒田市から福島県は遠く町の方と会えず残念なのですが、町の連絡帳もできたのでお世話になった知人や友人とのつながりをこれからも大切にしたいと思っています。

原発から20km圏内にあつた私の職場が閉鎖となつたため、同社の酒田市の事業所に移籍しないかというお話しをいただき、一昨年6月、家族でこちらに暮らす決心をしました。

震災から2年が経ちましたが、この2年は本当に早く、はじめの4カ月は決心することや決まらなくてはならないことがとても多く、あつという間に過ぎました。母も移動ばかりの状態では元気がならないと思いましたが、これからどうするかを考えているより仕事を優先し生活をするのが大切と思えました。酒田市は冬が厳しく、息子や親戚が近くにいないので不安なこともあります。まずは母と家族と一緒に落ち着いて生活がしたいと思っています。



渡部 賢次さん・しげ子さん(立野)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：5月11日 「平成25年6月 広報なみえ掲載」

浪江町が3つに区域再編されたことが残念 —孫たちが帰ることのできる 実家を早く再建したい—

渡部さんご家族は、震災直後、おばあさんやお孫さんたちと8人で親族を頼ってさいたま市に避難し、現在まで生活しています。賢次さんは、東京都内を中心に内装工の仕事をはじめ、もう2年ほどが経とうとしています。お話しは、賢次さんと妻のしげ子さんからお聞きしました。

震災直後の3月14日に埼玉に暮らす弟を頼って、家族8人で避難して以来、このさいたま市ですと暮らしています。浪江では、孫3人を含む家族8人で一緒に暮らしていたのですが、今はそれはかなわず、バラバラの住まいで暮らしています。おばあさんは、浪江では畑で野菜を作っていました。住宅街のなかでは草取りもできず、家の中にこもったままです。妻は、近隣のスーパーで買う野菜などの食品の鮮度や質が悪いことをいつも気にしています。浪江の暮らしは本当に豊かなものだったことを町の外に出てみて初め



▲左から 賢次さん、テウさん、しげ子さん

て実感します。私は、内装工のアルバイトをしています。毎朝、東京都内の現場に通勤していますが、いつも混雑した慣れない道のりでの長時間の通勤には本当に苦労しました。とにかく生活のすべてが変わってしまったわけです。私は今回、避難指示区域再編を浪江町が受け入れたことを本当に残念に思っています。浪江町の暮らしは、室原川や高瀬川などの限られた水源に支えられています。線量の高い方からの川の流れは、町全体に影響を与えることにもなります。もし影響が無いと言われても、町民と

してはやはり不安です。私が住んでいた上立野行政区では、この問題を何度か話し合い、町への提言も行いましたが受け入れられませんでした。政府の対応を含め、私たち被災者の声はどうすれば届くのか、戸惑いだけが残ってしまいます。そんな線量の高い、不安な土地にも私も私たちが戻ったとしても、子どもたちや孫たちは来ることにはできないと思います。孫たちが帰ってこないような実家なんて意味がない。家族8人で楽しく暮らしていた浪江での日々のことを思い出すと、なぜこのようなことを考えなければならぬのかと涙が出てしまいます。いつまでも迷っているだけなく、これから先のことを決断しなければならぬとは思いますが、踏み込めない日々が続いています。震災から2年以上が経ちましたが、きつとこれだから私たちがとって悩みの深くなる本当の時間がやってくるのだと思えます。浪江の皆さんとのつながりを大切にしながら頑張っていきたいと思います。



中村 秀之さん(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：4月28日 「平成25年6月 広報なみえ掲載」

子どもたちの成長していく姿が楽しみです

中村さんご家族は、山形市のアパートで皆さん一緒に暮らしています。孫の心優ちゃんも生まれ、にぎやかに過ごしています。

震災当日、私は青森に出張しており、次の日の夜やっと浪江町に帰ることができましたが、もう町には誰もいない状態で、家族とは津島の避難所で合流することができました。妻・明日美の兄を頼り矢吹町に避難し、義理の姉が山形県出身だったことがきっかけで、まず山形県高島町へ避難することを決めました。そこでは子どもさんがいる浪江町のご家族とも会え、今も連絡を取り合っています。その後、仕事や利便性も考えて2年



▲左から あつき 咲咲さん、あのん 文音ちゃん、あんり 安李ちゃん、あまね 天音ちゃん

前の6月、山形市に暮らすことを決めました。避難当初の荷物は毛布5枚だけ。部屋の中はすごくガラシとしていて、広いねと話したこと覚えています。今は、子どもたちの学習机や家具も揃い、狭いくらいで賑やかに過ごしています。

4人の子どもたちは、それぞれ高校・中学校・小学校・幼稚園に通っていました。避難生活がこんなに長くなるとは思わず、学校のことが一番不安でした。町の友達と離れてさびしい気持ちがあつただろうと思いますが、学校に行きたくないと口にすることもなく元気に通ってくれ、本当に安心しているところです。

避難しているということには関係なく、子どもたちがのびのび楽しく過ごすことが私たちの願いです。冬には学校のスキー教室もあり、色々な経験をしているようです。私たちも、今年PTAの役員になり父母の皆さんと交流することも多く、地域の子ども会の流れもわかってきました。子どもたちも地域のお祭りや学校行事に参加し、土日は大忙しです。私たちの心配をよそに、「山形の地元の子だ

と思った」と言われるくらい、いきいき過ごしているのになによりだと思っています。

機会があれば、浪江町で生活ができることを一番に望んでいます。まだ先のことまでは考えられませんが、子どもたちの成長にとって、避難後では今が一番良い環境です。町に戻るとしたら、子どもたちが自立した頃に考えようかと思っています。山形県では、認められた理由がない限り、借り上げ住宅の住み替えができないので、これから受験する子どもたちにとって家の中が騒々しいのが心配なところですね。

浪江町復興支援員の方に、いつも交流イベントに誘っていただき感謝しています。子どもたちの浪江町のお友達は県外に避難している子も多く、大きなイベントの時にしか会えないのが残念ですが、こちらで開催される町の交流会に参加して町の皆さんともいろいろお話ししたいと思っています。楽しむという言葉がふさわしいかわからないのですが、今山形で私たち家族らしく毎日楽しく賑やかに暮らすことを大切に過ごしています。



吉田 直子さん(苧宿)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内・井戸川
取材日：5月8日 「平成25年6月 広報なみえ掲載」

前へ進んでいきたい



息子さんと養豚業を営んでいた吉田さん。現在は千葉県松戸市で娘さんとの二人暮らし、前へ進んでいきたいと、野菜づくりを始められました。

豚舎の屋根の上で修理をしていた時、震災が起きました。思わずそのまま屋根にうつぶせになり落ちずにすみました。主人が6年前に亡くなりその後、長男と1、800頭の豚を育ててきました。主人がいない事もあり、日頃から何かの事故が起きた時に備え、気をつけていましたが、まさかこのような震災が起こると思ってもみませんでした。避難するその日、最後の餌を与え、豚舎の扉を全部閉め、こ

れで育ててきた豚がすべて死ぬのだと覚悟し、長男と家を後にしました。14日朝、双葉厚生病院で働いていて二本松の男女共生センターに患者と一緒に避難させられていた三女の顔を見た後、伊達市の従兄夫婦の家に向かいました。そこで1ヶ月ほどお世話になりその後、私は次女がいる松戸に落ち着き、現在は三女と2人で暮らしています。長女は流山で看護学校に通い、次男は郡山で働き始め、長男は香取郡多古町の農業センターで働いています。

ではありますが、農家のお手伝いをしながら野菜づくりを勉強中です。畑まで自転車で40分かけて通っていますが、畑の作業が楽しみで苦になりません。いつか畑の一角に家を建て、毎日畑仕事を楽しめたいと思います。震災後しばらくして、逃げ出した豚に家を荒らされたと聞くたびに迷惑をかけて申し訳ないという気持ちでいっぱいになります。一時帰宅した際、豚舎が綺麗に片づけられたのを見た時にも、放射線量の高い場所で作業してくださった方のことを思い辛くなりました。

松戸に来てからパン屋に勤めていましたが、子ども達から「十分働いたのだから好きなことをやれ」と言われたのをきっかけにパン屋を辞め、震災前からやりたかった畑をやろうと思いい立ちました。『田舎で暮らしたい』と小さい頃から言っていた私にとって、風が抜けない都会の生活は辛いものです。しかしこちらに来て知り合った人は皆さんとても親切で、私がいつか、畑をやりたいと話すと、早速あちこちの農家に聞いて下さいました。そのお陰で今は週に三日程

私は、まさか浪江を出ることになるとは考えもしませんでした。今すぐに戻るのは無理のこと、しかし将来戻るようになるのであればもちろん戻りたいです。それまでの間、自分の居心地のいい場所を見つけて、浪江へ戻る日のことを思って、前へ進んでいきたいです。浪江町民それぞれが、避難者として暮らすのではなく、一歩進んで自分の足場を築いていけたらと思います。



茨城県

水野 亮汰さん(権現堂)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 天井

取材日：5月10日 「平成25年6月 広報なみえ掲載」

今の自分を育ててくれた周りのみんなに感謝し、 自分も伝える側として成長していきたい

震災後、南相馬市や棚倉町に避難後、親戚のいる茨城県のひたちなか市に住むことになりました。現在、亮汰さんとお母さん、お兄さん、妹さんと暮らし、お父さんは茨城県内の少し距離のある場所にお勤めされ、お住まいと職場を行き来しながら過ごしています。

今年、3月にひたちなか市で行われたプロバスケットボールチームリーグJBL2のオールスター戦に被災地の高校生代表として出場を果たし、4点を獲得しました。

震災当日は、中学校の卒業式の後、友人と外に出かけている最中でした。夕方、家族と合流し、その後避難しました。避難先で今後の進学のことを家族と考えると、親戚のいる茨城県ひたちなか市に行くことになりました。両親が教育委員会や高校に聞いてまわってくれたこともあり、市内の高校に編入することができました。

今、通っているのは1学年6クラスの普通科の高校です。元々進学を予定していた工業高校で「良い体験をしてほしい」という顧問の先生の強い勧めもあり、オールスター戦に出場することになりました。試合では、プロ選手と積極的に話ができ、プロ選手の中でもリラックスした状態で楽しくプレーすることができました。

今の自分があるのは浪江や今の学校の先生や友達やいろんな方のおかげです。たまに寂しくなったり、考えたり、後ろを見るときもあるけど、みんなそれぞれ場所が場所、頑張っていると思うと立ち止まれないし、自分が立



▲オールスター戦に出場した際のユニフォーム

ち止まっちゃダメだろうって言うか、自分が前を向いている姿で、他の友達も「水野も頑張っているから頑張るか」と思ってもらえたら嬉しいです。

今、一番伝えたいことは「感謝」です。それはいつでも伝えられるわけではないし、何かの拍子に伝えられなくなるかもしれない、今、どこにいるかわからない人もいるから、この紙面を通してお世話になっている方に「ありがとう」を伝えたいです。

今後は今までお世話になった先生たちが伝えてくださったように勉強だけではなく、いろんなことを年下の子たちに教えられる仕事をしていきたいです。

これから先、戻れる時が来たら、中学3年の学園祭の出し物だった映画のロケ地で、遊んだ思い出の詰まった泉田川の土手や浪江町に友人たちと行ってみたいです。



鈴木 竹子さん(棚塩)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：5月10日 「平成25年6月 広報なみえ掲載」

なんでこんな目に遭うのかと、 何度も何度も思いましたよ

津波で地区が流され、さらに原発事故からの緊急避難を強いられ、ようやく6カ所目でこの北幹線応急仮設住宅に落ち着かれたそうです。

あの大震災から3年目となり、隣近所の方々とも親しくお付き合いが出来るようになり、やっと心穏やかな日々を過ごせるようになったとおっしゃいます。その一方で、18歳で室原から嫁入りしてまもなく太平洋戦争を体験し、そして今、東日本大震災と試練続きの来し方を振り返ることもあるそうです。



■息子をちゃんと褒めてやりたかったと、今更のように思います

大地震が起きた時、息子は現場での用を済ませて帰宅し、孫を幼稚園に迎えに行った嫁はあまりの揺れに途中からやっとの思いで引き返して帰っており、サービスに出かけた義母以外は、みな一緒でした。なんでもかんだもなく、あの地震の揺れと津波は想像以上にも凄かったです。家族で高台にある棚塩霊園に避難しましたが、地区の水門の係をしていた息子は、家族が引き留めたにも関わらず、責任を感じて海の水門を見に引き返し、

そのまま帰ってきませんでした。そんな最中に原発事故が起きて避難することになり、捜索も満足に出来ぬまま、生き地獄のような思いで消息を待ちました。息子は40日後にようやく発見され、5月初めに二本松で葬儀を行った際には、親の私がびっくりするほど多くの方々が避難されてきているにも関わらず遠方からも弔問に駆けつけて戴き、心から感謝しております。

津島の高校、中学校から福島市北高校、嫁の実家のある茨城県日立市、福島の友人宅と転々と避難し、ようやくヴィライナワシロ（耶麻郡猪苗代町）で群馬に避難していた娘と合流して約2カ月を過ごした後、今の住まいに移りました。その間に別々に避難していた義母は小田原で亡くなりました。家族が傍にいない心細さや悲惨さは言葉に尽くせません。

■ここはやはり、仮の住まい。棚塩の皆さんと穏やかに暮らしたい

2011年7月初めに入居しましたが、皆さんがど

この地区から避難されているのかもわからず、朝晩のご挨拶ばかりでしたが、最近はお話を言い合ったり、おかずを交換したりしながら打ち解けることが出来るようになってきました。6、7軒は同じ地区の方がいますし、自宅で皆さんとお茶飲みをすることもあります。

また、仮設住宅住民でつくる寿会や習字教室にはよく参加したり、桑折町にある浪江町デイサービスセンターや愛犬を預かってくれている友人を訪れたりしながら、忙しく毎日を送っています。隣りには娘がいますし、日立にいる孫たちも時折訪ねてくれます。ですから、福島市は第2の故郷なのかもしれません。が、それでも、たとえ浪江に戻れなくとも、小さな家でもいいから、同じ地区の人たちと安定した土地で暮らしたいと思っています。

またこの機会に、衣食住に全て事欠いていたあの2年前、地元や全国の皆さまに何度も助けて戴いたことに対して、改めて深く御礼申し上げます。



宮城県

久野 俊洋さん(高瀬)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：6月10日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

宮城県仙南地域で交流会をひらきたい！ —2年経ち、益々感じる 浪江の皆さんのありがたさ—

久野さんは、現在宮城県角田市の借上げ住宅に、お父さんと奥さんと共に
お住まいです。息子さんはいわき市の高校に通うため下宿中。今の暮らし、
浪江の皆さんへの思いを語ってくれました。



▲右から 俊洋さん、圀雄さん、時子さん

■充実していた浪江での日々

今回は、私から役場に連絡を
して「こころ通信」への掲載を
お願いしました。と言いますの
も、震災から2年3カ月が過ぎ
て、浪江でお世話になった皆さ
んのありがたさをひしひしと感
じ、お礼の言葉を伝えたいと思っ
たからです。

当時は、浪江では焼肉食堂を
営んでいました。母の代から、
ちょうど26年間です。外から浪

江に移り住み、商売を始めた私
たちに対して、親身に面倒をみ
てくれました。また、お店を気
に入ってくださり通ってくれた
地域の方々。あらためて支えら
れていたことに気づき、感謝の
気持ちで一杯です。

そんな浪江の思い出と言えば、
野馬追に参加したこと、町民体
育祭に地域の皆さんと参加し楽
しく汗を流したこと、幼稚園や
小学校で知り合った親御さんた
ちのおかげで友人が増え
たことなど。充実した日々
でした。

野馬追に参加したこと、町民体
育祭に地域の皆さんと参加し楽
しく汗を流したこと、幼稚園や
小学校で知り合った親御さんた
ちのおかげで友人が増え
たことなど。充実した日々
でした。

■宮城県角田市に移住

現在は、私と妻の実家
がある角田市に住んでい
ます。見ず知らずの町で
はないので安心です。ま
た、知人らが私たちを勇
気づける交流会なども開
いてくれました。ありが
たいことです。

今の私の仕事は角田市
役所の臨時職員です。商
工観光課で市のゆるきゃ
らと一緒にPR業務に励
んでいるんですよ。妻の

時子は、地元スーパーに勤務。
今の暮らしを支え、息子の在世
の教育資金を準備するためにも、
お互いにしっかりと働かなければ
なりません。これから息子が挑
戦する、選んでいく道をしっか
り親としてサポートしていきたく
いと思っています。

時子は、地元スーパーに勤務。
今の暮らしを支え、息子の在世
の教育資金を準備するためにも、
お互いにしっかりと働かなければ
なりません。これから息子が挑
戦する、選んでいく道をしっか
り親としてサポートしていきたく
いと思っています。

■いつかは焼肉店を再開したい

今後の暮らしとしては、角田
に住み続けることになると思っ
ています。そして、本当は浪江
で営業していたように焼肉店を
再開したい気持ちでいっぱい
です。でも、難しいのが現状です。
店などの賠償に関すること、事
業を再開する場合の支援などの
情報があればうれしいのですが、
どう情報収集すればいいのかわ
かりません…。

こんな悩みもありますが、こ
れからは今までお世話になった
方との人づきあいを大切に継続
したいと思っています。宮城県
内にも多くの浪江町民がいると
聞きます。仙南地域にお住まい
の方を中心に集まり交流し、お
互いを励まし合えたらいいです
ね。



横山 浩志さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 阿部

取材日：6月9日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

今は無理でも、娘や息子が大人になったら夫婦2人で生まれ育った浪江に戻りたい

震災前は、苧野小学校で教諭をしていました。現在は二本松にある浪江小学校に転勤になり、家族と住む郡山から通っています。



▲横山浩志さんとご家族
左から 恵美子さん、和佳奈さん、知明くん

■離れ離れだった家族の安否
私は苧野小学校で勤務中に震災に遭い、妻は浪江町の会社、娘は請戸小学校、息子は保育園、両親は自宅とみんな、ばらばらでしたが、苧野小学校が避難所になっていたためその対応に追われ、家族となかなか連絡がとれませんでした。
妻は勤務中でした。会社は倒壊しましたが、幸いにも机の下に避難して九死に一生を得ました。また妻が偶然知り合いに遭

い、息子を保育園に迎えに行くことができ避難所の苧野小学校まで乗せてもらうことが出来ました。しかし、その時点ではまだ娘と両親の安否を確認することが出来ませんでした。
一度、自宅に戻ろうとしましたが、道路状況があまりにも悪く先へ進むことも出来ず断念しました。
その夜、請戸小学校の教頭先生から連絡を頂き、娘の無事に安堵しました。
翌朝6時に娘を迎えに行きました。その時、防災無線を聞き、先ず妻の車を取りに行き、津島へ急ぎました。余震も激しく、道路は避難する車で渋滞していました。その後、葛尾村へと移動した夕方に1回目の原発の爆発を知りました。その夜には全村避難となり妻の実家のある郡山へ身を寄せ、15日の2回目の爆発の後には姉を頼って東京へと避難しました。
両親の安否を確認出来ないまま避難しなければならぬことと、娘と息子の安全を確保しなければならぬ思いとの間で葛藤があり、遣り切れない思いでした。インターネットや県警に問い合わせをしながら両親を探

し続けましたが、茶毘に付された遺骨との対面になりました。暫くは、両親への後ろめたさやどうすることも出来なかったものの気持ちの狭間で、眠れない夜も随分ありました。
■いつか帰れる日を願って
震災後すぐ4月には、私の仕事と娘の中学校への入学のため東京から郡山に戻ってきました。大分、気持ちも落ち着きました。請戸の自宅へは2度戻りましたが、津波で地区全体が何もかも流され、自分がどこに立っているのかさえもわかりませんでした。
現在は、浪江小5年生5名の担任教師として生徒たちの心のケアをしながら、みんなで一緒に前向きに頑張っています。
また、娘も参加している浪江町請戸地区の郷土芸能の「田植え踊り」を復活させ、県内の仮設住宅などで踊りを披露しています。請戸を感じられる唯一の行事です。避難生活を送っている皆さんにも大変喜んでもらっています。
今はこのことを励みに、一日も早い原発事故の収束といつか戻る日を願いつつ、日々を送っています。



渡部 清美さん・多津子さん(井手)

取材者：浪江町千葉県駐在 大内・井戸川

取材日：6月11日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

とうろう流しに 「浪江に早く帰れるように」と願いを込め

福島避難所から郡山へ、東京での生活を経て、千葉県松戸市で暮らす渡部さんご夫婦。帰れないと言われても帰りたい、いつ帰ることができるのかわからない事がつらいと話されました。



■清美さん

地震が起こったその時、家内とテレビドラマ見ていました。見ると家内は買ったばかりのテレビにつかまっていた。何度もの余震に怖くなり、その日は納屋で過ごしました。翌日、避難命令にしたがい、津島の体育館に避難、二本松の岳下公民館を経て、郡山の親戚の家で2泊した後、東京の練馬にいる娘の家で3カ月世話になりました。松戸に来たのは一昨年12月、病

院が近い現在の住まいは、松戸に来て2カ所目の家です。

私には持病があり、避難先を転々としながら週3回の通院は大変でした。浪江にいた時は車で何処へも行っていました。慣れない土地での運転は怖いので今はしていません。歩いて行ける距離に親切的な医療施設があり助かっています。

ここからバスで10分くらいの所に「黄色いハンカチ」という避難している人たちが集まるサロンがあります。そのスタッフの方が誘ってくれた「とうろう流し」では、灯籠に「早く浪江に帰れるように」と祈りを込め流しました。

離れてみると浪江の良いところばかり思い出されます。井戸の水、採れたての野菜、米、新鮮な魚、みんなで飲み交わす酒、本当に豊かだったと思います。バラバラになった知り合いや友達とは、もっぱら携帯で話をしていきます。でも声だけ。会って話したいです。

震災直後、余震の影響での避難と思い、2〜3日で戻る体

制で出てきましたが、とんでもない事でした。「これからどうするんだ」と言われても、決断ができない、答えられない。「帰れない」と言われても帰りたい思いでいっぱいです。子どもの頃東京から田舎に疎開した事がありました。またこの年になって「疎開生活」です。関東にいる兄弟が、時々訪ねてくれるのが慰めになっています。

■多津子さん

一時帰宅をした時、時計だけが動いていたのが思い出されます。朝起きると、ここに寝ていたんだと悲しくなります。

もう帰れないのではと思うけれど、2人で頑張つて暮らし、いつか帰らなげやとも思います。浪江のみんなに、会いたいです。今、ベランダで野菜や花を育てています。きゅうり、なす、ごうや、なんばん、トマト。どんな実がなるのか楽しみです。



半谷トミ子さん(藤橋)

取材者：茨城NPOセンター・ commons 天井

取材日：6月8日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

教えを実践しながら、毎日を過ごす

群馬県に避難後、娘の呼び掛けでつくば市の公務員宿舎に過ごしています。今は、近くにいる娘さんとやりとりしながら毎日を律しながら過ごしています。

浪江町で生まれ、小さい頃はいわき市の平駅近くにあった大きな洋食の食堂をやっている家にいました。いわき市で進学生になった。一時、横浜へ進学し、高校生の頃は一時、横浜へ学徒動員に行っていました。いわき市に戻ってからは食堂を閉め、浪江町に生活を移し、震災まで過ごしました。食糧事務所をしていた旦那と結婚し、息子と娘2人を授かりました。旦那は早くに亡くなったけれども、周り



▲部屋に飾ってある手づくりの小物や家族の写真と

の方には本当にお世話になりました。所属していた会では会計を務め、今でも会の方々とやりとりすることもあるわね。
娘は双葉町と大熊町に嫁いで、嫁いだ先から浪江町によく孫と一緒に帰ってきてくれていました。来た時には大勢の食事やおにぎりを準備して泊めていたの。そんなこともあってか、避難先の群馬のホテルでは孫には随分助けてもらったわ。ホテルでの生活は朝礼や敷地内や部屋の男で分担しての掃除など規則正しい生活でした。
10月、つくばで住むところが見つかったと娘から連絡があり、つくば市の方に越してきました。しばらくは近くに娘2人の家族が住んでいましたが、娘の1人はいわき市の方に行くことになりました。

息子もつくばで同じ部屋に生活していました。たばこやお酒が多かったこともあったけれど、知り合いがいなかったり、道が分からなかったり、生活の変化もあったんだろうね。一昨年亡くなりました。元々精神的な障害があつてね。それを考えるとして、私の体が弱くなった時の苦労かけずに済んだし、1人で残しておくことも心配だったから「あんた親孝行してくれなね」って思ったわ。
今はね、やっぱり身近に気楽に話をする仲の良い友人がいなのが寂しいわね。買い物は近所のスーパーに行ったり、近所の卵屋さんと「あら、今日はあなたが担当なのね。これ持ってきたから食べて」ってちよつとした惣菜を持って話に行くことはあるわ。それでお互いに「半谷さんお茶飲んできな」ってやりとりもあるのよ。
今の楽しみは毎月届く会の会報が楽しみ。毎朝お経を読み、部屋をきれいにしてしんとするようになるの。こつちに来てから始めたひょうたんの作り物や小物を飾ったりするのが好きでね。時々書道で好きな言葉を書いたりもしています。健康に気をつけて、子どもに迷惑かけずに過ごしていきたいと思うわ。



福島県

堀井 君子さん(田尻)

取材者：一般社団法人 葛力創造舎 下枝

取材日：5月31日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

みんなで支え合える場をつくりたい

浪江町大堀から郡山市に避難中の堀井さんは、まわりに友人もでき、みんなで話せる交流の場ができ始めているといいます。「こもりがちな避難中のみんなが集まれる場があれば、いろんな話を、聞いたり話したりできるし健康にもいいんだよ」と堀井さんはおっしゃっています。

■震災の時の様子は？

震災のときは自宅にいました。いつもは遊びにきているはずの中学生の孫がいなかったの必死に探しました。家の中や周りで名前を呼んで探しましたが見つかりませんでした。玄関を確認したら靴がなかったの娘に確認したところ、娘の家にいることがわかりほっとしました。

■現在の生活はいかがですか？

先行きが決まらないことや浪江と郡山の暮らしの違いに落ち着かない気持ちでいつもいます。人一倍健康だと思っていました。避難後、体に不調がでるようになりました。郡山の接骨院にいくようになりましたが、スナップの方の元氣っぽい挨拶や、先生と話すことでホッとすることができました。それからだんだんと体の調子もよくなり始めました。

■新しいお知り合いはできましたか？

郡山市住民の方や避難所で知り合った方で友達ができ交流もでき始めました。中には家に遊

びに来てくれる方もいらっしやいます。ある方は味噌を持ってきてくれて、買った味噌が食べられなくなるほど美味しいです。道を教えてもらい、自分で郡山市内を出歩くようにもなりました。郡山の地名もたくさん覚ええました。郡山は坂が多くて大変ですね。

■いま感じていることを教えてください

いろいろ話を聞きますが、仮設住宅や借り上げ住宅で籠もりがちになると、なかなか外に出づらくなります。周りの目が気になって気後れしてしまう。どん

な話でも人と話すことで、気持ちも晴れるし、健康にもいい。家にこもりがちな人が、もつと外に出られるようになったらと思います。借り上げではなかなか隣近所と仲良くなれないが、私は近所とのつながりができればどこかにいけばお土産を買ってきてくれたり、雪はきをしてくれたり隣近所の付き合いができてきた。頼まれて、近所の留守中のお宅の庭の手入れもしたりしています。これからは浪江の人同士や、郡山のひと、みんなをつなぐ役割になれたらと思います。





熊田 伸一さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：6月12日 「平成25年7月 広報なみえ掲載」

「来る者拒まず」の心意気で、 自治会の仕事をしています

笹谷東部仮設住宅（福島市）の自治会長と、今年4月に設立された福島市相双自治会連合会の会長も兼務される熊田さん。穏やかな表情の陰には、故郷への思いや福島市への避難のことなど、怒りや悔しさもあるのですが、本当に静かにあの日のことなどをお話してくださいました。



▲いつも“秘書”のようにおじいちゃんに付き添う優希君と。避難のため転校をし、今は3校目の福島市岡部・岡山小学校に通っています。

■時折、離れ離れになりながらも、福島市では家族一緒です。大地震が発生した時は、高瀬にある会社で仕事をしていました。慌てて請戸の自宅に戻ると、家族は既に避難するところでしたので、私は再び会社に戻り、そのまま泊まりました。妻と娘2人、孫の家族4人は浪江町役場の隣の町民体育館に、母は姉夫婦宅にと、家族はばらばらに避難しました。

翌日、原発事故による避難命令が出て、妻の母も連れて津島の浪江高校分校に行き、やっと家族と合流出来ました。その後、14日の午後には川俣町の双葉町の臨時役場の建物に避難し、18日には山形県へ移動して4月半ばまで山形市スポーツセンターにおりました。県外に避難したことで情報が極端に少なく、妻がひと足先に福島に戻り、二本松市東和の塩沢で1週間ほど避難生活をしながら二次避難の情報を集め、連絡を取り合いながら、ようやく猪苗代観光ホテルに移ることが出来ました。翌日には姉と一緒に戻った母も合流しましたが、避難先だった東和コミュニティセンターで体調を崩して歩行が困難になり、4月19日に太田熱海病院に入院しました。

6月6日に妻と孫家族がこの笹谷東部仮設住宅に先に入居し、私は母の退院を待つて14日に家族と合流しました。現在、母は市内にある老人保健施設にありますが、カートを押して歩けるようになりました。また、昨年10月に娘が結婚して千葉に嫁いだことは、家族にとって明るい出来事でした。

■ここで、皆さんのお話をします

津波で流された自宅を見に行ったのは、だいぶ時間が経った、夏頃でした。

例えば浪江町のインフラが復旧しても、家は有りません。原発に対する不安も大きいです。震災前、庭には畑があり、母が野菜を作っていました。田んぼはお貸しして米も作っていました。その全てが無いのですから、帰らないことを家族みんなで決めました。

会社は二本松で営業を再開しましたが、私は避難中に定年を迎えました。今の楽しみは晩酌です。時折、気の合う仲間と酌み交わすこともあります。

現在、笹谷東部の自治会長を務めておりますが、請戸では隣組をお手伝いした経験もありますし、浪江町の各地区から来られた方々と一緒にさまざまな活動に取り組んでいますよ。



浦 喜一さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：7月5日 「平成25年8月 広報なみえ掲載」

今は、とても落ち着いています

震災前はご夫婦でタイル工事を営んでいらっしゃいましたが、避難のため津島から郡山、埼玉、二本松、福島市と転々と移られ、ようやく2年前に福島市南矢野目の仮設住宅での暮らしを始められました。震災前や避難中は体調に大きな不安もありましたが、現在はお元気に自治会長として多くの支援活動団体を受け入れたり、役場などとの仕事に精力的に取り組んでいらっしゃいます。



▲奥様の利子さんの作品を背景に

■余震に脅えながらも、孫娘たちの安全が最優先でした

一昨年の大地震が起きた時は、近所に住む娘夫婦の家が新築中で、その夜から新しい家に泊まりながら家を整えようという矢先でした。私たち夫婦が住む家は大した被害は無かったのですが、余震が頻繁で恐ろしく、庭に車を止め、毛布を持ち込んで私たちと娘、孫3人とで一晩過ごしました。

翌朝、避難指示に従って津島へ向かう途中、孫の一人がひどい車酔いになりましたが、物凄い渋滞のため引き返すことも出来ませんでした。3日間、津島

中学校の2階の廊下に寝泊まりしましたが、本当に寒かったです。その時に初めて請戸の津波や原発事故を知りましたが、放射能の怖さはさほど考えませんでした。

15日には二本松でスクリーニング検査を受け、郡山に向かいました。ガソリンが無くなりかけていましたが、娘の勤務する会社が用意してくれたホテルバーデンに辿り着き、大変お世話になりました。特に、心臓の薬が僅かで不安な中、親身になってくださった看護師さんとの出会いに助けられました。

12日間滞在した郡山から埼玉に向かい、私の妹宅に私たち夫婦、弟宅に娘と孫たちが約2週間身を寄せましたが、浪江のサテライト校が福島北高校に出来ることを知り、家族で二本松市東和に戻った途端、4月11日の大きな余震に遭い、3月よりも怖い思いをしたことを思い出します。孫たちは福島市飯坂町に借上げ住宅が見つかり、私たちは二次避難で空きが出たあづま体育館に移り、7月にやっと南矢野目の住宅に入居しました。

このような不安定な避難の中、幼かった孫娘たちは本当に大変だったと思います。昨年4月、高校2年生になった長女は、いわき明星高校の双葉地区サテラ

イト校に通うため、親元を離れて寮生活を始めました。次女は東和針道の浪江中学校を卒業した後、この春から本宮の県立高サテライト校に進学しています。三女は福島市飯坂小に5年生から通い、時折ストレスで体調を崩したりしましたが、今は元気に大鳥中に通っています。

■自治会役員としての最大の悩みは「人集め」

最近では、福島に落ち着いてしまったような思いになることもありますが、2年前、ここへ越して来た時には知っている人は1割もいませんでした。約190世帯のうち、70歳以上の方が大半で、一人暮らしは約3割弱です。

私は2012年から2代目の自治会長になり、役場などのさまざまなやり取りや団地内のいろいろな困り事がありました。これが、これまでのルールを引き継ぎながら解決してきました。そんな中で一番苦労する仕事は、大勢の支援活動団体の方が来られてさまざまな活動をしてくださる際に住民へ声をかけ、1人でも多くの参加者を募る事です。今後立場が変わっても、自治会のお手伝いを続けていきたいと思っています。

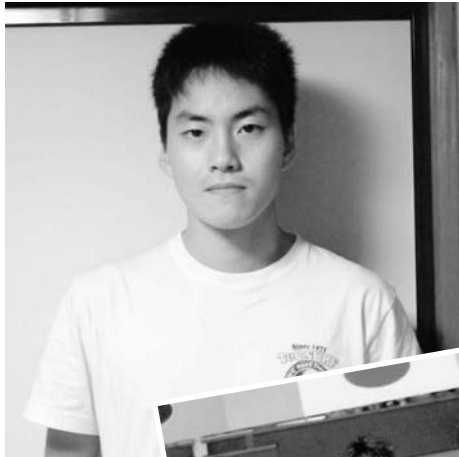


前田 賢人さん(川添)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 榎本

取材日：7月6日 「平成25年8月 広報なみえ掲載」

今の夢は、地元浪江で働くこと



現在は、新潟県柏崎市の社宅で母と2人暮らしの前田賢人さん。

慣れない土地で悩むこともあると言いますが、市内の高校に通いハンドボールの練習に励む毎日を過ごしています。将来の希望や、浪江への思いを語ってもらいました。



部活の仲間達と
(左から2人目が
前田さん)

■不安な日々

地震で、部屋の窓は全て無くなり、ブロック塀は根元から倒れ、瓦も道路や庭に散乱。それでも家族の無事を確認できた時の安心感は、今でも覚えています。

川俣南小学校の避難所へ行く時、人の多さにまともに休める状態ではありませんでした。食

料も無く、その時を過ごすことが精一杯で、原発事故のことすら忘れるくらい必死でした。

「猪苗代へ行くと、「浪江町から」と言うだけで受け入れてもらえませんでした。なんで？という思いでいっぱいになりました。

その後、他の避難所へ行きましたが、兄の知り合いがいる新潟県柏崎市へ行くことにしました。新潟県に入ると、1メートルはある雪の壁に驚き、不安になりました。

今でも、雪のある生活には慣れません。「長靴必須」にはとても驚かされました。新潟の冬は、浪江とは違い晴れ間が少ないです。

■今後について

慣れない土地での高校生活は、馴染むまで大変でした。友達もいなく寂しい時もありましたが、ハンドボール部に入部し、今は学校生活も楽しく過ごしています。ハンドボール部では、自らゴールキーパーに立候補し頑張っています。7月29日から佐賀県で開催されるインターハイにも出場。今はインターハイに

向けて、部活の仲間たちと練習に熱を入れる毎日です。部活をきっかけに、とても充実感のある高校生活を過ごしています。

昨年の浪江の会に参加しました。友達に会えるかも！と期待を膨らませて行きましたが、誰も来ていなくてとても寂しかったです。浪江の友達と連絡が取れない状態です。この「浪江のころ通信」を見て、自分が元気でいること、みんなが元気であることが分ければ嬉しい。昔のように地元で遊ぶことは出来なくても、また連絡を取り、みんなに会ってこれからの話をたくさんしたいと思っています。

今、一番の願いは、高校卒業後は地元・浪江で働きたい！ということです。ですが、今の浪江は生活が出来る状態ではなく、いずれ戻れた時にも仕事があるのだろうか、という不安でいっぱいです。
それでも生まれ育った浪江が大好きです。



茨城県

近藤 都さん(川添)

取材者：3.11支援チーム リゅうのしっぽ 三井・加藤

取材日：7月10日 「平成25年8月 広報なみえ掲載」

京都そして茨城県での新しいスタートへ

浪江町で念願の手作り雑貨や大好きなカントリー雑貨の自宅ショップを開いていた近藤さんご家族。

息子さん2人と愛犬・アップルちゃんと都さんご家族は大震災後、住み慣れた浪江町から京都へ避難されました。

そして先月、茨城県牛久市に転居されました。



浪江中学校のそばにある自宅の一角で、4年前から「Vanilla Box」という手作りカントリー雑貨のお店をしていました。3月11日、突然の大震災。何度も起きる余震で家の中は足の踏み場もないくらいにメチャクチャになり、手がつけられないほどでした。そうしているうちにパトカーからの「避難してください」という誘導があり、2人の息子達と愛犬・アップルとともに車に乗り込み避難しました。猪苗代湖、栃木県那須、群馬県、静岡県と転々となりました。

京都の姉の家へと車で1週間ほどかけて避難しました。狭い車の中で息子達とアップルと一緒に寄り添って寝ていました。車の中は窮屈で大変でした。姉の家に1週間ほどお世話になり、団地に入居しましたがペットが飼えないところなので姪にしばらくアップルを預けていました。ある日突然行方不明になり、後日、警察署に保護され、無事、家族の元へ帰ってきました。その後、京都でペットOKの物件が見つかり一緒に暮らす事が出来ました。最初の頃は何もする気が起きず、ボートとしていた日が続きました。これでは自分がダメになる気がして少しずつ「また何かを作りたい。」と思い、コツコツ小物を作り溜め、ちょうど京都市左京区の百万遍知恩寺境内で「手づくり市」を知り、数回、出店する事が出来ました。京都は有名な観光地でもあるので、福島のお友達が避難先より遊びに来てくれてお互い愛もないおしゃべりをするのが何

よりも嬉しく元気が出ました。茨城県牛久市に6月下旬に引っ越しをしました。兄達も近くになったから遊びに来てくれると言っています。茨城県に引っ越しして来てから声を掛けてくれたり、ご近所の方がお野菜を持って来て下さったりと嬉しい事がありました。福島県から避難されている方の交流の場には参加していきたいと思います。いつになるかは分かりませんがもう一度お店を始めたいと思っています。どこに住んでいても浪江は私の「ふるさと」です。いつも心の中でそう思っています。



群馬県

長竹 麻弘くん(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：7月12日 「平成25年8月 広報なみえ掲載」

失ったものよりも得たものの方が多いと信じてい —幼いころからの夢に向かって これからも頑張っていく—

『浪江のこころ通信』第1号に掲載された長竹麻弘くんは、現在、群馬県伊勢崎市立東中学校2年生。浪江にいた頃から続けている剣道、そして書道に今も頑張っている。2年前の取材の時とは見違えるほど立派な青年になった麻弘くんは、お母さんを支えながら、自分の夢に向かって前向きに進んでいきたいという。



▲大好きなスーパーこまち号のポスターと麻弘君

今は中学校の剣道部に所属して、毎日、朝早くから夕方遅くまで、そして土日も練習に頑張っています。群馬の夏は暑いので大変ですが、レギュラーを目指しています。同じく浪江の頃から続けている習字も7段になり、群馬県のペン書道展では2年連続優秀賞を取りました。そして高校受験も近づいてきています。僕は、鉄道関係を専門とする運輸科のある東京の高校に進学したいと思っています。これは浪江の保育園の頃から夢だったし、

今も変わっていません。去年の2月にあった猪苗代での浪江小の卒業式以来、もう浪江の友達には会っていませんでしたが、今年の6月、浪江小の時のランドセルが送られてきました。その中には請戸川のゴミ拾いをした時の作文がそのまま入っていました。あの頃をとても懐かしく思い出すことができ、本当にうれしかったです。

群馬では、福島のことをニュースなどで伝えることが少ないし、ふだんの家族の会話の中からも少しずつ福島の話が減ってしまっている。たまたま福島や浪江のことがテレビに映ると、やっぱり浪江に帰りたいという思いが心のなかで高まってきます。でも、犬の散歩でお母さんが近所の人と立ち話をしていたり、僕も全国一斉テストで自分の学校名を県名から記入したりすると、自分が群馬に暮らしていること、そしてこの生活に慣れさせていることをあらためて感じます。大震災によって、浪江町を離れることになったり、友達にも会えなくなったり、失ったものがたくさんありました。だけど一生懸命頑張っている今の自分があるのは、震災からのいろいろな経験があったからこそだと思っています。お母さんも今年から介護の仕事に毎日頑張っています。どんなに疲れていても、毎日忙しくしているお母さんを見てみると安心します。これからもそんなお母さんと支えあって、頑張り合って、自分の目標に向かって進んでいきます。



福島県

(株)叶屋 叶 経道さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原

取材日：8月8日 「平成25年9月 広報なみえ掲載」

「苦労は考えない」 (株)叶屋浪江SS 町内での事業再開第1号

現在、南相馬市に奥さんの郁子さんとお住まいの叶経道さんは、震災後すぐに動き出し、原町でガスと油の配達をなさっていました。「町内で営業ができるようになったらやる」という強い思いを実現され、7月1日に権現堂のガソリンスタンドで営業を再開されました。「大きなことは言えませんが、やるだけです。」と、おっしゃいます。



▲権現堂のガソリンスタンドにて

震災の日は権現堂の本社にいました。すぐにやむかと思っただけですが、横揺れがひどくどうしようもなかったためスタンドを閉めました。川添のセルフスタンドには緊急発電の設備があったので、給油が出来ることを、警察、消防、東北電力へ伝えに行きました。それから、西病院へ自家発電の燃料があるか確認に行き、スタンドに戻って夜10時頃まで営業しました。

翌朝、従業員も出社しましたが、避難命令のため閉めざるを得ませんでした。それから、妻の実家の埼玉県入間市に2週間避難しました。その後、会社の保養所がある宮城県蔵王町で2年2カ月ほど暮らしました。浪江は、歩く距離で飲食が出来る用事があるところのどこにも行けるのが魅力でしたが、蔵王に避難している時は、スーパーまで10kmもあり、遠くまで行かないと新鮮な魚も手に入らず不便でした。今年の5月16日に南相馬市のアパートへ転居して浪江に通っています。社員9人も同じアパートに住んでいます。

震災前から町内のスタンドのほか、原町で営業もしていたため、震災後も事業は完全にストップしませんでした。浪江でできる時にやる“という気持ちでした。そんな思いに親切だったのは、金融機関で、政府の助けがあつて進んでこられたと思います。



▲従業員の皆さんと一緒に
(左：中野良孝さん、右：佐藤友和さん)

今はお客様が多くありませんが、将来、人が戻れば何とかなると思っています。いつまでも悩んでもしょうがない、YESかNOかでやっています。町内に従業員がいれば防犯対策につながりますし、復興が本格化すれば町内に入る工事車両なども増えるはずだと思います。

早く地元が復興すればいいと思いますので、上下水道や道路網の復旧を出来る所だけでも進めて欲しいです。

人や年代によって考え方は違うので、それぞれの所で頑張るしかないと思いますが、浪江に立ち入りした時は、ガソリンとドリンクの販売機があるので皆さんに来ていただきたいですね。



橘 弦一郎さん(川添)

取材者：一般社団法人葛力創造舎 下枝

取材日：8月11日 「平成25年9月 広報なみえ掲載」

「なみえ」を子どもたちに残していきたい



▲橘 弦一郎さん (中央左)

浪江焼麺太国集合写真▶



「家族は地域と会社が支える。」
震災前から浪江のまちづくりに携わってこられた橘さんに、震災前からこれまでの経過、まちづくりについて感じていることをお聞きしました。

■震災前から今まで：

震災前は、浪江町川添に住んでいました。震災後は一度、滋賀県に避難をしました。本当は滋賀県から福島に戻らないと決めていたけれど、なみえの町おこしをしていたこともあり、再び戻ってきました。嫁は滋賀県に残してくるつもりだったけれ

ど、福島にくると言ってくれたので一緒に郡山市に住み始めました。その後2年余りの間、郡山市から南相馬に2時間かけて通勤し仕事を続けていました。震災当時は、南相馬市の人口も10000人まで減り、原発のこともあってなぜ戻るかとか周りによく言われました。スタッフはみんな避難していたため、1人で仕事の対応をして、多いときは70本も80本も電話が鳴っていました。毎日毎日怒られて、1人での対応でもあり心細かったです。休みも取れなく帰るのはいつも深夜で、もう死にたいと思うときもありました。

■家族は地域と会社があつて成り立つ

浪江町商工会青年部に所属していますが、時間を拘束され、家族との団らんの時間が減ってしまう中で青年部に入ることに意味があるのかわからなくて、初めはいいや始めた活動でした。浪江焼麺太国も本当に町おこしできるのか疑心暗鬼でした。そのとき先輩に言われたのが、家族は地域と会社があつて成り

立っているということ。家族が良くて、社会が衰退すれば社会福祉が満たされなくなる。会社が衰退すれば、給料が下がりが家族を食わせていけない。家族と地域と会社が良くなければならない。

■「なみえ」を子供たちに残していきたい

苦労して遠い職場に通勤することに、なぜやるのか？バカみたいだと周りから言われました。郡山で仕事を見つけたら、原町に家族を連れて行けばいいじゃんとも言われました。けれど、原発事故で避難している人々にはそれぞれの状況がある。この感覚は同じ状況にいる人たちでないとわからない。浪江町のコミュニティは崩れ始めているところもある。帰ろうと決めた人、新しい土地に住むことを決めた方いろいろな方がいる。でも、みんな浪江町民。なみえ焼そばを通じてルートとしての「なみえ」を残していきたい。子どもが将来胸を張って浪江町出身と言えるような、そんな世の中にしていきたい。



高野 武さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：8月2日 「平成25年9月 広報なみえ掲載」

再び海の仕事をできるだろうか。 不安と期待が交錯します

漁師をしていた高野さんは、次男と2人で海に出ていることもあり、後を継いでくれる息子さんに何か遺してやりたいと、この秋、新造船製作の契約を考えておられます。

しかし、国や東京電力には海への影響をもっと真剣に考えて欲しい。汚水処理のことはもちろん、放射性物質の影響について専門家や海を熟知している我々漁業関係者の声に耳を傾け、結論ありきで一方的な話しをするのではなく、再生へのさまざまな可能性を隠さず伝えて欲しい。言いたいことは山ほどあるが、このままお互いに聞く耳を持ってなくなってしまうのは不幸だとおっしゃいます。



▲津波で唯一残った大漁旗を持って
(右から 武さん、母:アイさん、妻:幸子さん)

■大玉村を経由して、秋田県大仙市まで避難しました

あの日は海の潮が大きく引きまされた。ラジオで三陸沖に津波が到達するというニュースを聞き、地区の避難場所になっている大平山に行きました。妻は役場の隣にある避難所へ直ぐに移動し、私と息子は家へ毛布や布団を取りに一端戻りました。役場に向かう途中、請戸橋付近で水平線に白い波頭が見え、波が約10mの松林を乗り越えており、津波だと直ぐに解りました。その後、役場の4階から見たのは部落全体が波打っている光景でした。

翌朝、原町に住む娘家族と共に避難しようと、私たち親子4人と娘家族6人で川俣町を経由し、大玉村まで行きました。役場の計ら

いで村の避難所と公共施設「アットホームおたまた」に3日間お世話になりました。

その後、秋田県大仙市大曲に住む友人に誘われ、ガソリンの残量が不安でしたが15日早朝に家族10人で出発し、山形で2時間待ちの給油をしながら、なんとか辿り着きました。

■秋田にはいろいろ思い出があります

大仙市には翌年の5月まで滞在しました。福島県からの避難者第1号ということもあり、取材等も多かったです。市の生活環境の仕事も頂き1年間働きましたが、何しろ福島の情報が少ない上に家の船のことも気になって戻ることになり、福島市の北幹線仮設住宅に入居しました。浪江に近い原町辺りに転居したいのですが、一端県外へ避難した後に仮設住宅に越したので簡単には移れないようです。

秋田に居た時から時間がたくさんありましたので、昔覚えた「松鳩文化刺繍」の制作に再び取り組み、大仙市を引き上げる時には市役所に贈呈し、会議室に飾って頂きました。今でもこれらの作品を見、近隣の方が時折来られますよ。

今、食べ物や風評被害が大きくなる被害がもつと怖いです。秋田でも謂れない噂も幾つか耳にしました。うちには4人の外孫がいいますが、謂れない差別や将来の結婚の際など、一番下の孫娘がことに心配です。また、放射能物質の

身体への影響は、要らぬ心配と言われるかもしれませんが、どうなるものか誰も解らないだけに不安です。

■自治会の仕事を通じて「おか」の人たちとの交流がはじまりました

昨年度末に川口元会長が辞任され、4月から自治会会長を引き受けましたが、生活時間が異なることもあり、町内の人たちとの付き合い合ったことがありませんでした。

でも、住民の方々がとても協力的で助かっています。支援活動団体さんも継続的に来てくださり、折々の人集めは大変ですが、平日の集会所はほぼ満杯です。広島や富山など遠方からも時折お越しになります。

復興住宅等への移住等もあり先は見えませんが、積極的に皆さんとお付き合いを深めたいと思っています。



▲制作に1カ月かかった15号の大作と共に



山形県

佐藤 眞敏さん・鈴子さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：8月9日 「平成25年9月 広報なみえ掲載」

山形からふるさと浪江の復興を 思い続けています

佐藤さんご家族は、現在も山形県山形市で暮らしています。「浪江のこころ通信」第1号の取材当時は、慣れない土地でのアパート生活でストレスがあったそうですが、借上げから引越しし、ようやく地に足をつけた生活、落ち着いた生活ができるようになってきたと感じているそうです。

また、眞敏さんは、昨年7月から浪江町復興支援員山形駐在として、町民の皆さん一人ひとりに寄り添うサポートを目指し活動しています。



▲佐藤眞敏さん、鈴子さん

お孫さんの^{れな}怜那ちゃん(3歳)、^{きっぺい}桔平くん(2歳)と一緒に

震災から1年の間は、山形県内のひめさゆりやぼたん、しゃくやくなどの花を見に行ったり、果物を買に行ったりと家族で様々などところに出かけました。知り合いもなく何もすることがない家族単位での生活で、外に出かけると当時の状況から解放されるといふこともあったのかと思います。今考えると狭いアパートで過ごすことや環境が変わったこと、当たり前のことが当たり前ではなくなった毎日が、目には見えない精神的なストレス

スになっていたのではと思いません。昨年7月から、山形県駐在の復興支援員として活動しています。訪問活動や交流会などを行い、徐々に町の皆さんの状況がわかってきたと思います。活動では、山形県内全域の避難している世帯を個別に巡回しています。さまざまな方の話を聴き、「皆さん頑張つて生活している、町のために私たちも頑張らなくては」と思っています。初め、同じ山形市に約60名の浪江

の皆さんが避難していることを知り、近くに私たちと同じ気持ちで多くの方が暮らしていることに安心したことを覚えています。避難してから2年5カ月過ぎましたが、支援員として町の皆さん一人ひとりに寄り添う支援を心がけています。企画や訪問活動を通

して、町の皆さんの不安を少しでもとりのぞくことができるようなサポートを行いたいのです。自宅は津波の被害に遭い、原発も近く不安定な状態ですので、地に足のついた住まいをこちらに求めて春から借上げを出て暮らしています。アパートを出たことで、とても心が落ち着きました。戻りたくても戻れないことに焦りや不安を感じた時期もありましたが、自宅が流されなんともならない状態の中「まずこの場所で生活をしていかなくては」と、決意した時期がありました。息子夫婦もこちらで仕事を頑張っており、今家族と一緒に暮らせることに感謝しています。家族を支えながら、支えられながら、浪江町の復興を願う山形の地で暮らしていきたいと思っています。



松本 教夫さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：9月2日 「平成25年10月 広報なみえ掲載」

明るく前を向いて、長生きしよう

現在、福島市のまちなかに立つ森合仮設住宅に、ご夫妻と避難の時もずっと一緒だった97才になる義母の3人で暮らしていらっしゃいます。

「時間が経つほど浪江には帰れないかもしれないと思う。家業再開も難しいけれど、請戸で200人の方が亡くなったことに比べれば、何てことはない。それにしても鮭とほっき貝は惜しいなあ」と教夫さんが笑う傍で、一緒に微笑んでいる妻のひろ子さん。ご夫妻の気丈な笑顔が印象的でした。



▲教夫さんと一緒に、たくさんお話をしてくださった妻のひろ子さん

■人とつながっていること、話
しができることが一番です
私もは建築資材店をやっ
ており、あの日は自宅隣の店の棚
が大きく揺れ、店番をしていた
妻と嫁、配達から帰って来た息
子や従業員も大騒ぎになりました。
余震が何度もあったし避難
所も寒いだろうと思ひ、暗闇の
中、石油ストーブや湯たんぽで
暖を取りながら、私たちと隣に
住む息子夫婦と孫2人の家族6

人で過ごしました。

翌朝、消防団員だった息子か
ら避難を告げられ、妻の母が住
む葛尾村に向かいました。電気
も水も、食料もあつたので助か
りました。3月21日朝、村の人
や自衛隊の案内で、義母と私た
ちは役場のマイクロバスに乗っ
て会津の柳津町に集団避難をし
ました。町の避難所には床暖房
があつて暖かでしたが、既に7、
80人が避難。浪江町民がずっと
世話になるわけにはいかなだ
ろうと、東京・町田市に住む妻
の姉を頼りました。先に世話に
なつていた息子に会津まで迎え
に来て貰いましたが、ガソリン
の配給を受けながらの大変な道
のりだつたそうです。

役場からの連絡で、5月14日
に猪苗代町中ノ沢温泉の花見屋
に移りました。浪江町の方々が
大勢避難されており、顔見知り
が多くて毎日賑やかでしたが、
どんどん仮設住宅などに移られ、
9月5日に離れる時には私たち
が最後でした。寂しかったです
よ。

■住むところやこれからのこと
は、今から考えます

ひろさんは当時を振り返り、
「東京での避難が一番辛かった

です。あの頃に見たチェルノブ
イリの番組で、故郷に帰っちゃ
ならない人たちのことを知って
ショックでした。着の身着の
ままでお金もなく、大切なも
のがすべて崩れてしまい、落と
し穴に落されたような気持ちで
した。砂を噛むようなごはんつ
て、こういうことだと知りまし
たよ。」

中ノ沢温泉に避難していた4
月初め頃に、息子と一緒に浪江
の自宅に通帳や仕事の書類を取
りに行きました。5年前に銘木
や漆喰にこだわって建てた我が
家や植木、息子たちが住んでい
た古い家はネズミに荒らされ、
酷い有様でした。

「息子の将来を思って、土地
や店舗など資産に投資をし、お
客様とのつながりも築いて来た
のに、生きてきた証が無くなつ
てしまいました。新しい生活と
言われても、限られた保障では
どうしようもありません。」と
ひろ子さん。

現在、森合仮設住宅15世帯の
自治会長を勤めています。み
んなで仲良く暮らすことが一番
です。私たちは公営住宅にでも入
れば有り難い。国や町には手
厚い補償と再建のための良案を
望んでいます。



山本みよ子さん(室原)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：9月5日 「平成25年10月 広報なみえ掲載」

皆さんから元気をもらいながら

山本みよ子さんは、震災後、山形県天童市にご夫婦お二人で暮らしています。夫の勝さんは、現在、単身赴任中とのこと。住んでいる借り上げ住宅の近所の方から、野菜や果物をいただいたりお茶のみや観光に誘っていただいたり、気兼ねないお付き合いの中で人のつながりに感謝しているそうです。



▲遊びにきていたお孫さん、大誠くん(4歳)、
柚樹ちゃん(2歳)、即大くん(1歳)と一緒に

浪江は、山に近く海に近く災害も少なく住んでいて最高の場所だったので、震災時、初めは揺れもすぐに収まるだろうと思っていました。ですが、なかなか揺れが止まらず、機械も倒れてきて会社の外に避難しました。まさかあれだけの地震だとは思いませんでした。その後、まず実家へ避難し、翌朝警報が鳴り、4家族11人で、娘の住んでいる山形県山形市に避難しました。町の他の皆さんも大人数で避難したと聞いています。娘の夫と

も相談し、当分は浪江町に帰れないのではということ、すぐこの場所を探してもらいました。孫・ゆずきを出産するため、山形から浪江に帰省していた娘が、震災1週間前に山形に戻ったところで、もし家にいたらと思うと…本当に無事でよかったです。今は庭に畑があり、孫の楽しみにと思いトマトを作ったり、花を植えたりしています。米農家もしていましたので、浪江で作った自分のお米も美味しかったことを思い出しますね。時間を見つけては、小物を作っており、山形の復興支援員の皆さんが企画した交流会で教わった「エッグアート」も自分なりにアレンジして作ってみました。あとは、孫の面倒をみることに忙しいです。浪江にいた時はこんなに孫と接することはできませんでした。

で、最近はまだあまり一時帰宅できないでいます。除染しなければなりません。雨が降ればいちごっこのような状態で現実は大変です。それでも何十年後か、いつか安全になった時、孫にも浪江の家を見せられるといいと思っています。また、浪江町自宅の隣組で毎年、柳津の虚空蔵様にお参りに行っており、これからも小さくないようにということになり、来月福島市に集まる予定です。

山形でも、娘家族の友達のお母さん、その友達の方など様々なつながりで物資を衣装箱ごといただくなど、自分がそうならここまでできるだろうかと思うくらい面倒を見てもらいました。一緒に避難した妹、孫、娘夫婦、近所の方など、多くの方の支えがあることに感謝しています。人とのつながりや関わりが一番大切で心の支えであり、元気をもらっています。浪江町で関わりお会いできない方も多く、この通信を通して感謝の気持ちと“元気です”ということが伝われば幸いです。



田中 研二さん(川添)

取材者：市民ネットワークわくわくプロジェクト土浦 日辻

取材日：9月6日、8日 「平成25年10月 広報なみえ掲載」

忘れずにあきらめずに伝えて生きよう

私（田中さん）は、震災当時、警備会社に務めており、当日は福島第二原発で勤務中であつた。現場に居るにも関わらず情報はなく、電話も繋がらない中、家族が一体どうしているのかさえわからず、無事で居てくれと願いながら3月15日まで、勤め先から出ることが出来なかった。いざ避難しようと思つても、浪江町内の実家や親戚も避難を強いられ頼ることが出来なかった。妻の妹夫婦が土浦から家族を迎えに来てくれ、私より先に避難したが、私もまた、土浦に来てたくさんの方々々に支援や励ましをいただきながら生活をし、現在に至っている。



▲現在の私たち



▲妻の妹夫婦と私たち

着のみ着のまま、土浦に来ました。当時中学を卒業したばかりの長男と小学4年生の長女も履いていた靴を脱ぐことも無いまま避難し、土浦にいる妻の妹夫婦がわざわざ迎えに来てくれるまでなすすべもなく呆然と避難所を転々としなければなりませんでした。

「あの時、一体なにが起こつたのでしょうか？」

私は福島第二原発で警備を担当していました。何事も無いこと、「無事であること」を維持するのが私の仕事です。しかし、あの大きな地震の後、警報が鳴り響く中、振り返ると見たこと

もないどす黒い激しい波が建物に迫っていました。家族の無事も確認できずただ祈りながら3月15日の退去命令まで福島第二原発で勤務をしていました。

私の実家も兄弟も皆近くに住んでいましたので、皆が避難を強いられました。妻や子供達は避難所で過ごし土浦で会うことになりました。

土浦では近所の方々が、長女が通うことになった小学校の体育着やランドセルを集めてきてくれました。長男は公立高校への編入がすぐに決まり、校長先生はじめPTAの方々やOBに掛け合つて、制服や指定のジャ

ジまで揃えてくださいました。新学期からすぐに子供たちが学校に通えたことは、私たち夫婦にとつても何よりでした。ただ長男はスポーツ推薦で、高校でも活躍が期待されていたことや長女も陸上競技で町の代表を目指し頑張っていたにもかかわらず、それを断念せざるを得なかったのは辛かったです。見知らぬ土地で友人も居ない中、頑張っていましたし、友人にも恵まれました。

そして、あつという間に2年半が過ぎ、長男は高校3年に、長女は中学1年になりました。断念せざるを得なかった夢とはまた別の夢に向かい、長男は「地元に戻つて人を助ける仕事をしたい」と今、頑張っています。多感な思春期にたくさん辛い思いをさせてしまいました。それでも、土浦に来て、周囲の皆さんからいただいた温かいお心づかいを忘れません。

今後も、先行きが見えませんが、子供たちの進学や就職の希望を出来る限り尊重した生活をしたいと考えています。あの辛い経験を忘れずに、そして一人でも多くの方に伝えながら浪江にいつか戻れることを目標に頑張つて生活していこうと思つています。



広島県

保田 武広さん(加倉)

取材者：ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 竹内・三宅

取材日：9月5日 「平成25年10月 広報なみえ掲載」

今、私に課せられた使命 ～心のキャッチボールから見えてきたもの～

震災当日は東京虎ノ門にて研修中に被災。息子（大樹さん）は原発に勤務、妻（照江さん）は西病院の看護師だったため、被災後約4日間院内にて勤務し、原発の3号機が爆発する前に避難。家族別々の避難所から東京で再会したものの、再び夫婦と息子は各々の生活へ。



▲いわきナンバーのマイカーと一緒に

地震発生後、各々は避難し、息子からのメールで無事が確認できました。家族が再会したのは、発生から5日後の東京でした。その後、息子は千葉へ配属、私たち夫婦は家内の実家のある広島県東広島市安芸津町にきました。千葉ではかわいい孫が生まれたばかりで、寝る前には必ず孫の写真をんでいます。当初、宮沢賢治の「雨二毛負ケズ」を思い返して涙をこぼすことがありました。文中に「西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い」とありますが、私はそのような稲の束を負えな

いし、病気の子供の面倒も見られない。死にそうな人に怖がらなくてもいいなんて言えません。ましてや、訴訟や喧嘩をつまらないからやめるではなく、一緒に加わる愚か者です。だから余計に賢治の理想が心に染みて泣くんです。震災の儚さと苦しみがそうさせるのかもしれない。安芸津町は良いところです。東広島市役所の住宅課さんのおかげで大変良い住居をお世話いただき、さらに家具や電化製品なども調達していただきました。仕事ではガス専門会社（孫会社）の係長として勤務しましたが、入社から半年して体調が崩れ、退職しました。その後はボランティア活動をしたり、原発に関する専門的な見地から納得いかないことを東電のコールセンターや資源エネルギー庁などに話したり、新聞を読んで理解できないことをレポートにまとめて（前述の）住宅課さんに読んでもらったりしています。新聞を読むたびに気持ち沈むと、住宅課の課長補佐さんと女性職員さんのお二人が、私の話をいつも聞いて

てくれます。自分のお仕事を後回しにして、本当に感謝しています。このお二人と話すようになって、人の心の重さ、大切さを感じるようになり、自分一人では何もできないということに初めて気づきました。福島で暮らす時には、すぐに怒鳴ることもありませんでしたが、少々偏屈なところもありましたが、今では人と人との心のキャッチボールが必要だと思えるようになりました。自分の中で、一步一步進んでいくような気がします。明日を生きる可能性を信じ、子どもたちには震災のことを何らかのメッセージとして残していきたいと思っています。みんなに支えられているから、今度はみんなを支えていく人になりたい。これが私に課せられた使命だと思っています。



新潟県

横山 俊勝さん(立野)

取材者：NPO法人くびき野サポートセンター 竹内

取材日：9月9日 「平成25年10月 広報なみえ掲載」

いつか、再び家族全員で暮らしたい

『浪江のころ通信』第1号掲載の横山俊勝さんご家族は、新潟県柏崎市で暮しています。掲載当時は裏磐梯に避難していたご両親を2011年の末に柏崎に迎え、現在は同じ敷地のアパートに家族が揃いました。「浪江町で暮らしていた時のように、家族全員で同じ家に住みたい」と、横山さんはこれからの目標を話されます。

■離ればなれの家族が集合

現在、私たち家族は新潟県の柏崎市で暮らしています。妻の兄夫婦が生活するこの地へ家族や親戚と自主避難した当時、父母と祖父母が福島避難所へ戻り、しばらく家族が離ればなれになってしまいました。今は4人を迎えることができ、私たち夫婦と3人の子どもたち、両親と祖父母に分かれて同じ敷地のアパートに暮らしています。家族みんなの顔が揃ったことで、改めて家族の大切さを実感。ようやく避難以前の生活リズムに戻ってきたように感じます。

■成長した子どもたち

避難当時、小学生だった息子たち、翔琉と拓海は中学生になりました。2人とも柏崎市の生活に慣れ、新しい友だちもできて充実した日々を過ごしています。もともと運動が好きな2人は、こちらに来てからスノーボードなどのウィンタースポーツに興味津々。私もスキーを習い、妻はソフトボールを始めるなど、

新たな生活の中に楽しみを見つけています。娘の詩乃は今年5

歳。今でも浪江町の家のことを鮮明に覚えているようで、大人たちが一時帰宅する際に、「置きっぱなしのおもちゃを、持って来てね」と頼みます。持ち帰ってあげたいのですが、放射線が心配できないところが残念ですね。来年は小学校にあがる娘や、こちらに居場所ができてくる息子たち。

確実に2年半の月日が流れたことを感じますが、以前と変わらずこれからも子どもたちのことを最優先にしていきたいと思っています。

■感謝の気持ち、そしてこれから

柏崎の人たちには本当に親切にしてもらっています。避難してきた当時、個人で避難者支援をしてくれた「共に育ち合い(愛サロンむげん)の方や、私たち避難者に積極的に声掛けをしてくれる地元町内会の方たちなど、数えたらきりがありません。しかし、いつかはこの地を離れな

くてはならない。今は「仮の住まい」での生活という思いが家族の中にあります。浪江町では、私たちは一つ屋根の下で暮らす大家族でした。再び家族全員と一緒に暮らしたい。この思いを胸に、これからも家族で支え合いながら日々過ごしていきたいと思っています。



▲後列：左から俊行さん(父)、恵美子さん(母)、茂美さん(妻)、俊勝さん
前列：翔琉くん(長男)、幸男さん(祖父)、詩乃ちゃん(長女)、ミイ子さん(祖母)、拓海くん(次男)



福島県

宮原喜美子さん(谷津田)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原

取材日：10月7日 「平成25年11月 広報なみえ掲載」

“自分を耕して、自分に種をまく”をモットーに ～ビーズアートジャパン大賞2013 佳作受賞～



▲手作りのビーズコレクション
と一緒に

佳作受賞作品▶
(ブレスレット)



現在、相馬市の大野台仮設住宅でご主人とお母様の3人でお住いの宮原さん。仕事をしながら震災後に取得された資格を生かし、ジュエリークリエイターとして常に前向きなチャレンジャーです。たくさんの方にお世話になったことをいつも心におき、感謝の気持ちで明るく暮らしていっています。

震災当日は、町内の現場で泉田組の仕事をしていた。すぐに帰るよう言われダンプを運転して戻ると途中に陥没している道路を見つけました。“これでは危ない”と思い、カラーコーンやバリケードを配置し、橋の段差を知らせる誘導を暗くなるまでしました。誰も事故に遭わずに済んで良かったとほっとしています。それから家に戻りましたが家の中はひどい状態だったので、夜は夫と母と車で過

しました。翌日、津島に避難し、3日後東和住民センターに移動して20日間いました。東和の人はみんな暖かくて、自分の布団が無くなるのではと思うほど運んでくれたり、薪ボイラーを持ってきてくれたりと親切で大変感謝しています。その後、裏磐梯で4カ月暮らしました。その時一緒だった10家族とは本当の家族のように過ごし、今でも交流しています。

浪江では趣味でビーズを作っていたので、材料を買うために会津の手芸店へ行った時、榎葉町から避難されていたビーズの先生に“資格を取らせてあげるからやりなさい”と応援されました。ピンチはチャンスだ、今までできなかったことが出来るのと折れそうな心を切り替え、震災の年の7月にジュエリークロスシユの技能認定をいただきました。また、昨年の10月には針と糸で編むビーズアートステッチの資格も取りました。そのおかげで、親切にしていた東和の皆さんに私にできる恩返しということでビーズ作りを教える事も出来ました。

そして今回、プロの方が出展するビーズアートジャパン大賞に応募した理由は、桂由美さんをはじめとする有名な先生の目に触れるだけでいい、仕事をしながらでもチャレンジできるのだとわかってもらいたいと思っただけです。作品は“ハーモニー(女神様のお気に入り)”という題名でネックレス、ブレスレット、イヤリングの3点セットです。250名の応募作品から選んでいただき佳作に選ばれました。福島からは私一人の応募でした。

“自分を耕して自分に種をまく”と思っただけでやってききましたが、その芽が出てきたのかなと思います。今はその種をみんなに分けているところで、みんなが喜ぶ顔が嬉しいです。

また、1年前からオカリナを月に2回習っています。楽譜もなかなか読めないのですが、みんなを明るく気持ちに引っ張ってくれる先生の姿勢を学びたくて始めました。

今、ビーズは人をつなぐ役割ですが、将来販売や教室で教える事が出来ればいいと思っています。大変だったことを思っているのではなく、それぞれの状況の中での沢山の出会いに感謝しています。いい人と巡り合えて来たのは人生の宝ですね。



村上 卓さん(田尻)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：10月8日 「平成25年11月 広報なみえ掲載」

田畑を耕したい ～恵み多き浪江に戻れるように～

村上さんご夫妻は、定年退職後、有機農業に取り組みながら落ち着いた生活ができる土地を望み、横浜市から浪江町に移り住み、穏やかな生活を送っておられました。震災後は、ご友人の心遣いで山形県天童市の住宅を借りることができ、現在ご夫婦お2人で暮らしています。



▲天童市のお住まいにて。
卓さん、喜代子さんと一緒に

地震発生時、私は棚塩のパークゴルフ場でパークゴルフをしており、家を離れていました。揺れがひどく立っていられませんでした。木も大きく揺れ、側溝の水も跳ねるほどで、「この揺れではもう自分の家も倒れる」と思ったくらいです。町内は塀が倒れ家も崩れ、通る道路は地割れしており、迂回して自宅にやっと帰ることができました。

まさか町から避難することになるとは思わず、翌早朝、瓦屋に屋根の修理を頼みに行き、すぐ避難指示を知りました。電気

地震発生時、私は棚塩のパークゴルフ場でパークゴルフをしており、家を離れていました。揺れがひどく立っていられませんでした。木も大きく揺れ、側溝の水も跳ねるほどで、「この揺れではもう自分の家も倒れる」と思ったくらいです。町内は塀が倒れ家も崩れ、通る道路は地割れしており、迂回して自宅にやっと帰ることができました。

地震発生時、私は棚塩のパークゴルフ場でパークゴルフをしており、家を離れていました。揺れがひどく立っていられませんでした。木も大きく揺れ、側溝の水も跳ねるほどで、「この揺れではもう自分の家も倒れる」と思ったくらいです。町内は塀が倒れ家も崩れ、通る道路は地割れしており、迂回して自宅にやっと帰ることができました。

が通っていないので、放送も鳴らず、自宅前の渋滞をみて驚きました。その後、津島から私の地元・横浜市に避難しました。もう都会に住むことは考えていないことを仕事時代の友人に話したところ、「山形県天童市に持っている家が空き家だから」と貸してくれ、2年前の4月から天童市で暮らしています。やはりこちらに来て初めは、知り合いがなく寂しかったのですが、友人達がさくらんぼ狩りに来たり、岳温泉で忘年会をしたりして集まることができました。雪の積もらなかった横浜や浪江とは違い、毎日雪かき、家の雪下ろしの心配など大変なことも多いですが、田んぼや畑もあり街よりも落ち着いて暮らせています。

8年ほど前、自給自足の有機農業をする穏やかな生活を求めて、夫婦2人で横浜市から浪江町に移住しました。田植え機、耕運機、稲刈り機などの農機具も揃え、手がかかって大変でも、楽しみながら安心して食べられる農作物を育てる生活をしたかったのです。浪江には孫達も休みの度に遊びにきて、釣りや陶芸

などを楽しんでいて、恵まれている場所だと思いました。

自給のできる農業ができるようになるまでは、色々な方に大変お世話になりました。何もかも初めてで夕方遅くまで作業する私たちをみかねて、近所の方が手伝ってくださったり、地区の牛農家の方に糞と堆肥を交換してもらったりと、本当にいろいろ助けていただいたことを思い出します。米、みそ、梅干し、干し柿など全部手作り。米も、土を作るところから、稲刈り、はせがけ、脱穀まで行ない、全部自分たちで手をかけ育てていました。育った作物は親戚や知り合いに譲り、野菜も大きく育つようになり、やっとな段取りよく仕事ができるようになってきた矢先の震災でした。

戻れるものなら戻って、また土地を耕したいという想いはなかなか消えません。住まうだけでなく、田畑も耕せるような恵まれた浪江の土地に、元氣なうちに戻れたら何より嬉しいことだと思います。



萩野 虎夫さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：10月7日 「平成25年11月 広報なみえ掲載」

帰れるようになったけれども、 未だ住めないふるさとを思う

福島市北部、伊達市や伊達郡との境に近い宮代応急仮設住宅に2011年8月に入居し、初代の自治会長に就任されましたが体調を崩され、会長職を交代されました。その後、再び会長に就任され、「宮代では引きこもりは一人もいません。互いを気遣う仕組みが自然に定着したのですね」と、自治会の2年半以上に及ぶ素晴らしい成果を話してくださいました。



▲静かに微笑む萩野さん

■二度とはないような出来事。
鮮明に覚えています

大震災当時、私は役場の嘱託を務めており、上ノ原の町営住宅の駐車場で地震に遭いました。隣家が今にもつぶれそうな大きな揺れで、普通に歩くことはできませんでした。一旦帰宅しようとしたのですが、途中の道は地割れだらけでした。家は、ぐし（瓦屋根）が半分大破し、妻はあまりのことに廊下に座り込んでいました。無事を確認し、直ぐに役場に戻ると、津波から避難して来た請戸の方々の対応に追われました。

翌12日早朝5時頃に避難を呼びかける町の放送を聞き、前の

家の家族と車2台で葛尾村へ向かいました。ガソリンスタンドでは幸いにも満タンにすることが出来て、南相馬市に住む妻の妹を頼りました。施設に行っていた義母は津波で流されて行方不明で、亡くなられた方々が安置されている体育館を訪ね歩き、何とかその日のうちに見つかりました。火葬場が運良く空いており、すぐに茶毘に付すことができたのが幸いでした。

義妹には1週間ほど世話になり、前の家の家族は会津へ、私と妻は仙台の娘の家に避難しました。その間に体調を崩して病院へ行つたところ、脳溢血の一步手前でした。その後、桧原湖のペンションに1カ月おりましたが、身体がどうにかなりそうだったことと、町の情報が入り難いことがあり、8月に完成したこの宮代に直ぐに入居することを決めました。

■支援して頂ける有り難さをつ
くづく感じていきます

宮代には、継続して支援活動をしてくださる団体が4〜5団体あり、特にカリタスジャパン

さんや北信カルバリー教会さんには大変お世話になっていきます。この近所の福島市北信グランドゴルフ愛好会さんからはいつもお誘いを頂き、皆、地元の方と楽しい時間を過ごしているようです。反面、仮設住宅に住む方々は大半が60歳を超えており、体育祭のイベントにお誘い頂いても、参加が難しい状態で申し訳なく思っています。

■浪江に行くのはよそうか、と迷うことがあります

浪江町の自宅には帰れるようになりましたが、住むことはできません。何もかも震災当時のままの町はゴーストタウンになってしまい、帰っても誰にも会えません。

国や県の対応が遅すぎて、町民が自ら動くしかない状態になっているようです。宮代でも自分の生活再建のために住まいを移す方もいます。近隣の自治会長さんとも話していますが、町には福島市に復興住宅を作ってくださいるようにお願いしたいものです。



福島県

鈴木 静子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：10月9日 「平成25年11月 広報なみえ掲載」

天から与えられたこの命、
天寿を全うしたいですね

『浪江のころ通信』第1号掲載の鈴木静子さんは、当時(2011年6月)岳温泉の東三番館に避難されていましたが、現在は二本松市郭内の仮設住宅に孫娘さんと暮らしています。「1年、2年半と経ちましたが、状況が変わらない今、先を照らす光が見つけれない」とおっしゃいます。



▲「今日はたくさん話してすっきりしたわ」とおっしゃってくださった鈴木静子さん

■浪江への思いが”行きつ戻りつする”毎日です

避難準備区域になった自宅の屋根を修理した後、なぜか放射線量が上がっているのですよ。このような状態で町に帰ることができないのだろうか、一向に収まらない原子力発電所の汚染水漏れは一体いつまで続くのだろうか、毎日逡巡しています。前回取材して頂いた時には、希望に溢れた言葉やふるさと浪江に対する思いを伝えたような気がしますが、今は、浪江に帰る時期などはっきりした目的がなく、生きるの辛いと思う時があります。また、50坪ほどの家の片付けを独りで出来るかしらとか、近所の人は帰ってくるのだろうか、10年後は心配せず

に住めるのだろうかとか、様々な思いが行ったり来たりしています。新しい一歩を踏み出され、仮設を出て行く方もおられて、櫛の歯が抜けるようになっており、何だか取り残されるよう不安です。

町には帰れる目途を示して欲しいですが、原発があのような状態でしょう、本当に安全性は確保されるのでしょうか。除染が済んでやつと住めるようになってたとしても、1〜2年後に再び事故など起きたらどうでしょう、などと思ってしまうのですよ。

■何かすることで、明日につなげています

町の社会福祉協議会やまちづくりNPOの会議など、お声がかかれば断らずに出かけています。

私は若い頃から剣舞を習っており、そのために始めた詩吟も、浪江から避難してきた方々と再び習い始めました。

先日、県文化センターで中島の絵を観て久しぶりに感動しました。何かに感動する気持ちも失っていたのだと、その時気がきましたよ。

それから、長年取り組んできた「天蚕*」を育て、広める活動も続けています。今年、仮設

の片隅で育てた繭は50個採れました。天蚕を育てたいという方がおられますので、霊山の天蚕の会さんとの交流を通じて、これまでの経験などをお伝えしたいと思っています。

*日本原産の大型野生蚕の一種。クヌギ、コナラ、エゾノキヌヤナギなどの葉を食べて成長し、孵化後、50〜60日くらいで繭を作ります。萌木色の美しい絹糸は「繊維のダイヤモンド」と呼ばれ品質も高く、希少価値があると言われています。

■孫の成長が一番の楽しみであり、希望です

仙台の大学に進学した孫娘が、週末に帰ってきます。孫は私を元気づけるためにカラオケに誘ってくれて一緒に楽しんだりしています。悩みなども聞いてもらい、助けられています。幼い頃からみると本当に成長したと思います。私は看護師をしていましたが、

定年退職後も訪問看護師として働いていました。3月11日は夫の四十九日で、公休を取り、夫の納骨を済ませて直ぐ後にあの震災でした。浪江ではこの時期、休日にはキノコ採りや天蚕の飼育を楽しんでいたのに、原発事故のために人生の貴重な時間を取られたような怒りや恨みなどもあります。人生、無駄な経験はないと信じて前向きに進みたいと思っています。



今泉 翔太さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：11月9日 「平成25年12月 広報なみえ掲載」

甲子園の先導役を務めた思い出を胸に、夢に向かって

秋晴れの11月9日、本宮市白沢総合支所（浪江町本宮出張所）に程近い「白沢運動場」で、町長杯ソフトボール大会が開催されました。出場した8チームのひとつ、「トッピーズ」の選手として参加した今泉翔太さんを訪ねました。

残念ながらチームは1回戦で敗退してしまいましたが、高校球児らしい潑刺としたバッティングや守りの固いセンターのプレーに、対戦チームSSBの選手たちからも盛んな声援が飛んでいました。

翌朝、母の実家のある畜尾村に、家族6人と近所の人たち3世帯で避難し、3日間過ごしました。その後、福島市のあづま運動公園の避難所に3〜4カ月いて、それから市内荒井の借上げ住宅に移りました。避難所の生活は

■野球を続けるために、福島東高に転校
2011年3月11日は中学校の卒業式で、地震が起きた時には家に帰っていません。母は祖母と妹を連れて車で出かけており、家には僕と父、それから祖父もいたかもしれませんが。家の一部が壊れましたが僕たちは無事で、その夜は近所の人たちと一緒に焚火をしたりしながら、車の中で過ごしました。

■甲子園の思い出は強烈です
福島東高ナインは残念ながら甲子園出場には至りませんが、今年夏の全国高校野球大会の開会式と始球式に、東日本



▲ひとつひとつの質問に丁寧に答えてくれた翔太さん

◀バッターボックスに立つ凛々しい姿

■社会を担う若者として活躍したい
来年春、埼玉県内の大学に野球推薦で進学することが決まっています。この大学の野球部は関甲新学生リーグに加盟しており、選手としてこれから活躍出来るよう頑張りたいです。

福島東高の選手は引退しましたが、野球部の練習は続いています。僕の野球好きは、たぶん父の影響が大きいですね。祖父もプロ野球好きで、小さい頃から家の中では野球の話が多かったと思います。

僕は将来、教員になって、出来れば高校野球の監督を目指したいです。

これからは、僕らが主役となって社会で活躍することになると思いますが、ばらばらになってしまった浪江の友だちもまた、社会人として活躍している姿で会えることを願っています。



神長倉豊隆さん(酒田)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原

取材日：11月6日 「平成25年12月 広報なみえ掲載」

浪江で“一人でできる花屋”を再開するのが夢

昭和27年開業の「美花」^{みはな}2代目としてフラワーショップを経営されていた神長倉豊隆さんは、現在、奥様と娘さんと3人で郡山市にお住まいです。

NPO新町なみえの理事長として、各地の交流会や盆踊り、十日市祭など町民の絆づくりの活動をなさっています。



震災当日は中学校の卒業式などがあり忙しい日で、妻と息子は配達に出掛け店には娘と2人でした。激しい揺れのため花瓶が落ちてきたりショーケースが傾いたりしましたが家族は無事でした。自宅は被害が少なく、夜は居間で家族8人が一緒に休みました。翌日、防災無線などで避難指示を知り津島へ避難し、3日後、二本松の花屋の友人からの連絡で妻と娘の3人で避難させてもらいました。そこで3月いっぱいお世話になり、4月から郡山にアパートを借りて現在まで住んでいます。息子夫婦

と3人の孫は息子の友人からの連絡で津島からいわきなどを經由し、今はお嫁さんのおばさんが住んでいる横浜に避難しています。避難生活が短く終わってほしいという気持ちとは矛盾していますが、息子には時間がかかるかもしれないのでこれから生活をしっかりとるように話しました。

浪江では商工会の商業部長だったので、事業再開のために何かしたい、復興のために何かしたいという思いがありました。5月の総代会でNPO新町なみえのメンバーとなる仲間との出会いがあり、まずは新町通りでやっていた盆踊りをしようということになり二本松で開催しました。当日は浪江の人達3、000人が集まり、沢山の出会いから人が集まる重要性がわかり十日市祭もやろうということになりました。規模は浪江の3分の1ですが二本松での開催は数十倍大変です。でも、苦勞の甲斐があり初年度は3万人の人出で遠くは九州から来てくれた方もいました。実はこの時に忘れられない出来事があります。い

わきの借上げ住宅に一人暮らしをしている90歳近いおばあさんが何度も列車を乗り換えて杖を突きながら来てくれて「浪江の人に会いたかった。」と、涙ぐんで話されました。やっていることがひとつの絆になる、お祭りは生きる元気や勇気を与えてくれると思いました。

お祭りだけでなくこれまでしてきた団体としての活動が人々喜んでもらっているのは良かったと思います。世代をつないでも浪江で子どもたちが安心して暮らしていけるふるさととの町づくりをしていきたいと思っています。

しばらくはNPOの仕事はしますが、いつか浪江で花屋を開きたいと思っています。「浪江での事業再開は俺の夢だ。」と、仲間にはいつも話しています。